

天竺行路次所見

北畠道龍師著述

三

ル 2  
3042  
2



門ル 2  
3042  
又

北畠道龍師口述  
天竺行路次所見卷三

北畠道龍師口述

門人

西河偏稱  
長岡洗心  
筆受

伊太利國のプリンジセ港より印度に發を

十月二十五日午前第四時プリンジセ港より「モン

ゴリ」號の英艦に投じて印度に發航を此の日天氣

牢晴些少の風波も無く海上宛も一面の砥よりも尚

不平易おして左の方より希臘の群山遙々我れと

揖をるが如く右の方より伊國の沿岸近く我れと戀

ふが如く我れとても亦さ久しく住み馴し歐洲を是

10/12

東京大学  
栄校圖書

坐し別と惜む心の切なる元んや去りとてと艦の  
行くこと速りなれど午后第五時頃より希臘伊太利  
の山々も淡乎たる一黛の雲煙と化し殆んど將さよ  
中海に至らんとせむ也嗚呼我れ曾て本邦を發して  
より以來今日程と滿腔の爽快を領せしことと之れ  
无き也如何んとあまば我れ世界歴檢の事業ハ既  
上り終りて唯だ是れ此の印度行の一つと缺く而已  
然して此の行たや我が邦建國以來能く之れを果  
し得たる者素門中未ど一人も是れ有らざる也然る  
と我れ一度印度小入て先づ佛尊の墓蹟を偵尋し及

ひ佛后遺教の轉次を詳明して我が佛教改正の備原  
おも致し度き素志ありし今日此の行に就て此の  
素志を果さんとせむ豈は滿腔の爽快非ざるを  
得んや  
二十六日今日も亦と天氣宇晴ふして右の方より伊  
國の連山の既と遠く煙化し去りたれども左の方  
より希臘の群山ハ尚不薄く一帶の黛の如く悠々たり  
二十七日今日ハ希臘の薄黛も全く消し去て四望雲  
涯中海茫茫たり八里(英里)の(マント)の(マント)の(マント)  
二十八日午前第九時「ポルトサイド」港に著る

二十九日此の八九兩日間は世界有名なる「シユエツ  
カナール」の八十八里(英の「マイル」)の堀り切りを通り  
抜けて三十日午前第八時頃「シユエツ」港に到着した  
り同日午前第十一時同港を發し是より亞刺伯海  
路に懸り右に埃土左に亞刺伯國と眈顧して行くこ  
と四晝夜なり

十一月四日朝第四時遂に「アデン」港に達したり  
五日午前第五時同港を發して之を直線より前より進  
めむ亞細亞の新和蘭の方へ行く也然るを之れを左  
に轉じて印度海に浮ぶ也「カビテイ」云く此の海に

恒に平易にして激浪を起すこと无くと云へども炎  
熱の苦き恒に此の如き也と即今十一月五日より  
て其の暑氣の太どき我が日本の大暑よりも尚不  
甚どき(單衣)にして尚不暑(を感ゆる也)是より  
東北の隅に針路を定めて行くこと七晝夜よりして同  
く十一日午前第九時頃西印度の網買港に達し「アデ  
レツ」云ふ西洋形の旅宿に投宿せる也

印度略史

抑も印度の邦たるや「ダライ」エツキス」として三角形の  
邦にして其の國尖の南の方た赤道の北緯八度より

起りて其の國尾ハ北の方た三十四度よ至て止む也  
 (此の長さ地理家皆云く六千里ありと)然して其の  
 國尾ハ西と東よ張り出(此の濶さ地理家或ハ云く  
 六千里ありと)北ハ西藏國と喜馬拉山脈を以て之を  
 界して其の國尖たる南よ走る程尖りて宛も埃土の  
 「ピラミート」の尖の如くよして印度洋よ突出せざる也  
 又た其の東ハ旁葛刺洋を中よして其の洋東よ緬甸  
 及び「ミラア」等の邦あり又た其の西ハ印度洋を中よ  
 して「ベリウスタンズ」「アブガニスタン」及び亞刺伯等  
 の邦あり然して此の印度の大初と云へバ「シリツセ

ル萬國史を書きたる人)及び「オルデンプル」(印度史  
 を書ひたる人)等云く原と「アルト、ヤール」(上古代)の昔  
 一印度草莽の時「ホフ、アジア」(高地の亞細亞)と云ふこ  
 と即ち蒙古及び「カウカジ」等の人々が水草を  
 追ふて段々西よ遂は喜馬拉山の西北の凹より北  
 印度よ入り彼の有名なる鉛絶斯(此の大河ハ其の水  
 源西藏より出で、印度を横切りふして西より東印  
 度の甲谷陀府を経て旁葛刺洋よ入る也)と温都斯(此  
 の大河ハ其の水源喜馬拉山中より出で、西印度と  
 皮路直坦との間だを経て西印度洋よ入る也)との二大

河の有るを見て衆欣然として云く此の如き二大河  
の在る有るを以て大ひは邦を可きも足る也とて其  
れより堤より草の殖つたる如く先づ此の二大河は沿  
ふてアルメリヒと段々よウオヌング（住居）を開き遂  
は此の地を画して五印度と爲すに至り也「オルデ  
ンブルヒ」氏云く此の印度人の大原を云へば「ホフ、ア  
ジア」人が鉛絶斯河の邊へ入り來り此の邦を爲せし  
其の上古ハ我々の邦は残りある所の印度の古詩「リ  
グウエダ」と云ふ詩は依て見ると何れ丈け古きこと  
、云ふことハ分らぬ故は印度人は於ても其の我が

邦の大原を忘れざることハ即ち希臘人や及び伊太  
利人の我々邦の大原ハ何所ら興りやと忘れし  
如く忘まさり然るハ「ウエダ」の詩は依て見ると原と  
「ホフ、アジア」人の印度へ入り込みしや其の法律も死  
き黒き人民を殺したり追ふたり又た属せ令めたり  
して温都斯河と鉛絶斯河の邊へ來りし其の中鉛絶  
斯河と「ヤムナ」河の相ひ合せし所へ來りし「アンガ」マ  
カダ「ピラハ」カツシ「ユサラ」等の入種が東印度の方へ出り  
けし者と見へる也然るは他の邦の入種ハ散々し印  
度へ入り込みしなれども「アリア」人の如きハ一塊と

なりて宛も大濤の来るが如く入り込み先づ温都斯  
の河邊なる「ベンチャフ」(印度の入り口)と云ふ邦は  
住みし也此の人種は外りの人種と違ふて最も大か  
ある文明を以て来りし也如何となれば此の人種が  
彼の有名なる「リグウエダ」の詩を制作したる人なれ  
ば也然して此の人種が東南鉛絶斯の方た「ヤム」河  
の合さる邊は進んで是より於て「ブラマ」聖人の邦と云  
ふ書と及び「ブラマ」百道言と云ふ書を制作さきたり  
其の中々の規則書は云く凡そ地球上は生れたる人  
たる者ハ此の「ブラマ」子シのら修身の教をを受け

ねばならぬと定めらきたり是れ此の「ブラマ」教が他  
日種々「ペツシイスモス」「ナスケタシ」「ナスケタス」「アス  
ケチック」「ゾフェイスチック」等の種類あり今之れを爰  
小説明をる小違あらざる也は分りきて大ひは印度  
の文明を争わ令めしりと(以上ハ「オルデンプル」氏  
の印度史に云ふ所なり)龍云く是れ此の「ブラマ」教が  
る者の釋尊出誕前に至るまでハ既は九十五種と分  
れて是れ此の九十五種が亦と分れて二となる一ハ  
「イデアールイスモス」の有の見の部(數論「ブラマ」が人  
と世界を二十五諦に分けて立つ即ち金七十論あり)

天竺行記 卷之三  
六

又と一ハ「マテリヤールイスモス」の「見の部」勝論ヲ  
ラマダ人と世界と十句に分けて立つ即ち十句義論  
ありおして此の二部互に「確然」として争ふて少くも  
止むこと无り一「所釋尊」此の間に出で、印度「ピロ  
ソフイー」の真意を以て彼の有「无」兩部の「アラマ」を質  
正するは「何れも之れ」答ふること能わざり一故に  
釋尊「梵爾」ふて云く然らハ則ち汝等が有と云ふ者も  
真有は非ざる可し又と汝等が无と云ふも真无は非  
ざる可しとて大ひは印度「ピロソフイー」の真意を開  
顯せられ一「所之れ」が為めは衆論の挫折せらるゝこ

と宛も枯れを拂ふが如く皆な悉く舌を結んで門下  
に伏を即ち其の最も巨擘なる者の舍利弗阿難(原と  
「アラマ」の大家の十大弟子等是れ也)是に於て釋迦蓋  
世の卓見印度の「ピロソフイー」を振然として興起し大ひは  
天下の文明を發揚せられざる也嗚呼印度文明の隆  
盛なる前後此の時を以て第一とせざる也是れ此の文  
明西の方埃土は行き羅甸希臘も亘り遂に歐洲を抜  
けて亞米利加も入る也是れ即ち「シリツセル」の萬國  
史に云云せり又と其の東の方の亞細亞洲中を經過  
して支那は行き遂に我が日本も来る(開元釋教録等



よ云云せり實は世界文明の「アテラランド」(父の邦)と云ふことと云ふ可き也然るは物換り星移りて佛后五百年の頃佛徒の稍や怠りたるは中りて「ブラマ」教が復た再び興て印度の教權更ふ「ブラマ」徒の手は落ちし也其れより以來は印度の文明日々に頽壞し國力漸次は靡敗して殆ど之れを如何んともさるこ  
と先きは至らんとさるの間は乘して葡萄呀人佛蘭西人等も印度は入て各々其の爲を所あらんとさるの際一千七百五十六年の頃英國の有名なる「ヘスチング」氏の東印度の甲谷陀に入り同く有名なる英國

の「プライグ」氏の南印度の馬塔嘶に入り以來は英國の遠政手段又大ひふ行われんとさるは及てや佛人の如きの特ふ百方之れを妬害と云へど「ヘスチング」及び「クライグ」二氏の小節拘わるは足らざるの深謀偉略を以て抗する者皆之れを誅夷し服する者悉く之れを拊循して今より百二三十年前哀れむ可し印度全國の版圖全く英國の所領となる也龍之れを考ふるは印度の爰に至る豈は獨り天子政府の先識先氣力に因る而已ならずや亦た是れ二億五千萬人の先識先氣力に因るや素とより也

嗟呼人民なる者亦た深く鑑を可き哉龍更ふロジツ  
カリセ(因明論法)を以て之れを云へば印度此の如く  
類壞谷まると云へども英國此の如く遠政巧みなり  
と云へとも若し「スチング」及び「クライグ」の二氏微  
せば英國印度果して此の如き今日有ることを得ん  
や必竟兩國の今日有るは此の二氏の有るを以て也  
扱て英國の此の二氏ありて此の事の成りし之れを  
且く「ロジツカリセ」(因明立ち)ふ云へば譬へば梅田の  
觀梅の如し梅も梅もして人ふ非ず人も人ありて梅  
ふ非を然し其の梅ふ非ざる人を以て人ふ非ざる梅

と一つ(因明論)の不相離性不用く所ふ於て梅田の觀  
梅と云ふことが出来る也然し人(客)が行て梅(主)が發  
ひたす非ず梅が發ひて人が行て觀梅するなむば觀  
梅の大原も先を梅ふ在ると素よりの事實なる二  
氏と英國との間だふ於て其の遠政の成りし此の  
二物の相ひ依る所ふ在りと云へども全く二氏の  
かふ在る知る可き也傳ふ云く人を得れば其の事舉  
るとい此の謂歎嗟呼我が日本の將來大機ふ就ても  
つゞまり欲ひ者の人なる哉  
印度ふ入るの路次

古昔唐の時代天竺小至る小其の路二つ有り一ハ即ち長安より龍西小出で玉門陽関を経て流沙を涉り南山小浴ふて西一葱嶺を越へて北天竺小至る也支那晋の代小法顯惠生等の北天竺小至る皆此の路小依る也故唐書地理志小云く安西の西關を出づる數千里小して疏勒を渡りて葱嶺小至る等と云々又た一ハ長安より蜀小入り雁越を過きて東天竺小至ると故唐書地理志小云西の方永昌故郡小至る小と三百里又た怒江を渡り諸葛亮城小至り驃國境小入り今の緬甸西の方黒山を渡り東天竺小至る凡

そ六千里許り有り等と然る小其の蜀より羅越を經て行く路を近しと云へとも甚た険難なを又た隴西玉門小出るの路ハ遠しと云へとも少しく平易の故小支那より天竺小入るの數名繁し皆此の路小依る也然し乍ら是れ此の二路ハ何れも皆な險呀遠遠小しく智識豪膽兼具の人小非ざれば果して行くこと能能ざる也然る小文明の今日小於てハダンブシツプ蒸艦艦の東行西趨所として至らざること死死きの秋なれを若し水路より行くときは甲谷陀馬搭斯是れ等の東印度有名の港なり及び鋼買是れハ西

印度の有名なる港あり等の諸港何れの地からでも  
容易小至り得可きかれども今日もてハ支那日本の  
間小於てさるどの素門も死むばよハ又た印度よ  
至り得るも佛蹟の踪もるも足る可き者も死く唯た  
英人の土人を叱びする苛政の太だ甚どしきを見るの  
外り他死き也嗟呼印度の不幸何為ぞ爰小至れる實  
小哀む可きの至り小非ずや  
日本の素門印度小入る果して誰れの矯矢とする  
日本開闢以來素門中印度小入らんとする者北畠道  
龍を以て第一矯矢とする甚と然らざる也如何んと

なまを諸君知らずや平城天皇第二の皇子高岳親王  
弘仁元年の事小際して太子の位を退き同く十二年  
遂小削髮染衣して真如と號し東寺ヨ行き道詮ヨ從  
ふて三論の深義を叩き又た空海ヨ就て真言の密意  
を受け遂小阿闍梨と成り貞觀四年萬僧宗叡を隨  
て入唐し支那小留筈すること殆んど二十年ヨ垂ん  
とむる也此の時中宗皇帝廢佛の後小して佛教頗る  
衰蕭し佛業亦た振わず是を以て親王抽然として自  
ら以為く如かず直ち小印度小行て我が佛尊の法源  
を求めん小もと更ニ支那を發して印度小向ひ玉ふ

于時年し我か陽成天皇元慶五年ふして唐の僖宗皇帝  
帝中和元年ふ當る也嗚呼親王を我が日本建國以來  
求法家第一の豪傑ふして弘法傳教等の支那不行て  
以て自ら足れりとするの類ふ非ざる也然るふ三代  
實錄陽成天皇元慶五年の紀唐書地理志等ふ依りて  
之れを見るるときは印度行ふ二路ある中の親王は北  
道ふ依らざりて東道より羅越を経て怒江を渡られ  
し也然るふ路ち漸く進んで流沙河の邊ふ至りしふ  
豈ふ計んや猛虎の為めふ害せらるる遂ふ薨じ王ひ志  
と也即ち陽成天皇元慶五年の紀ふ親王は羅越ふ至

り流沙を渡らんとして薨じと云ひ又ふ日本皇子傳  
よて親王遂ふ虎の爲りふ害せらるると有る也嗚呼  
其れ親王は日本開闢以來印度は向ふて法源と求め  
んとする第一矯矢と云ふ可き也惜ひ哉其の本志を  
中途に廢棄し玉ふこと是れは依て之れを云ふハ龍  
が如き者ハ即ち是を求法第二の人と云ふ可き也然  
るは彼れも不幸ふして中途に之を廢し我も幸  
ひよして遂に其の素志を果させし而已ふ非ぶ亦  
彼の第一求法家の志をも兼達して初めて日本求  
法の大榮を擧ることを得たり龍が天幸豈ふ些少な

らんや

鋼買港「アデレツフエ」氏の話

上は述べ如く十一月四日午前第九時西印度の鋼買港の「アデレツフエ」旅宿に投宿せし其の主人の名を「アデレツフエ」と云ふが故に其の宿を名けて「アデレツフエ」と云ふ也扱て翌五日ハ案内者を雇ひ鋼買都府を巡覽するふ土人街を實は醜卑衰廢相ひ谷まじりたまども英人の寄留地を見れば莊大嚴麗あして之れを見る計りてさる宜なる哉英國の為りも遂に御せらるゝこと實は悲慨の至りも非ざるや此の主人

「アデレツフエ」なる人ハ即ち印度人にして幸ひは英語を能くし加之ならむ印度の歴史を知ると云ふを以て即ち此の人ハ依りて印度古来の事實を歴史上は聞き又た即今内地の變轉せる實況を采り調ふるならハ先づ緊要を知らざるも有ふと考へし故に其の譯を申し入れ依頼せし所主人が我々も向ふて全体貴君方ハ何れの邦の人なるぞと尋ねられし故に我々ハ「イヤツパンニス」(日本人と云ふこと)と答へし所主人の云わらるゝハ是れまで日本ウラハ頼と人の来らぬ邦トヤ其れハ實は珍らしき邦の人

人なり然るも何んの為に此の印度に來り玉ふや  
そこで余龍自ら云ふ答て云くされむとよ我れハ日  
本の旅僧よりて即ち釋迦如來の大教を信奉する者  
ぞう貴君ハ定めて工承知ても有ふが古來支那よ  
り此の印度を參れ一人々の數多有りと云へども我  
が日本の業門する者此の印度を來り者未だ曾て  
一人も是れ有らざる也然るも即今我が日本を初め  
亞細亞地方の佛教を見るは邦として衰壞せざるハ  
元其の上其の本國たる此の印度に於ても亦と久  
しく佛教ハ敗類せりと聞く若し果して然らば實は

慨然の至り非ぢや抑も佛教と云ふ者ハ佛教實体  
に於て敢て興廢を為す者非ぢ其の興廢を為す所  
以んの者ハ全く是れ之を維持する者の手の如何  
んよ在ること素より之れを知ると云へども然し乍  
ら先づ此の印度に入りて此の佛教の衰壞せし手續  
きを詳くよ來り調べ其上歐洲宗教の隆盛(歐洲宗  
教の興廢をる所以んハ既し前年歐洲に入りて之れ  
を來り調べたりなる手續きと此見して大ひは佛教  
の再興を計んと思ふ心よて遙々爰に來り也其の  
上若し釋迦佛尊の墳墓の今も存在し玉ふなら

バ責てハ我ガ人民の總代とありて一度ハ拜至を遂  
げ參らせ幾く久しき教への鴻恩をも謝し奉り度く  
思ふて来りしなまば庶幾くハ貴氏我を補けて此  
の素志を果たさせ玉へういと懇に依頼せしうバ主  
人云く扱ては貴君を我ガ本國の佛教を信奉して遙  
々爰に來り玉ふの始終を承り如何にも感泣の至り  
は堪へざる也我れ等も本國のことなれど佛教の廢  
頽ハ如何計り悲まざるもの非ざれども時勢既ハ此  
の如し我れ等一孤の力らとて之れを如何んとも  
さること能はざれを徒に今日までハ暮せし也然る

に貴君ハ他國の人で有り乍らうほどまで此の佛教  
の廢頽を悲み玉ふを實は愧ぢ入りたることぞう  
此の上を責めてハ貴君の素志を果し玉ふ一分  
りとも補け參らる可し何なりとも心得たる丈けの  
ことを力になり申を可し遠慮なく尋ね玉へう然  
し乍ら釋尊の墳墓の如きハ殆ど二千五六百年の日  
支を經たれも其の痕と殆ど跡を可うらざる也我れ  
等五十歳の今日ふ至るまで隨分心懸けざるハ非  
ざれども其の何れも在ると云ふことを未だ之れを  
聞らざる也我れ等人民の墳墓とては千年も尚布遺



存ぞんざる者もの有あること无なし況いはや二千五六百年を經過けいごせ  
る佛墓ぶつぼ追尋おひまのことハ實じつニ思おもひを絶とち玉たまへか—と云  
われ—也其れより七晝夜ひちちうやの間あひ日々「アデレフ」氏  
の話を聞きき大おほひニ發明はつめいせる所ところ少すくなうらざる也其の  
詳細しうじゆハ我われガ別記べつきニ在あるバ追々おひ／＼述じゆを可よき也

余前さき日ひニ歐洲おほくを歴巡れきごんせ—とき獨逸どいつニ於おて「サンスク  
リット」(梵學)「アロフエシヨル」オルデンブルヒ「印度」ニ  
在學ざいがくせること三年と云ふ)氏又またニ露西亞ろしやの同おなく「プロ  
フエシヨル」ペトパーフバトリツチ「印度」ニ留學りうがくを  
ること二年半と云ふ也)氏及び即今まことに世界第一と云わ

れる英國えいこくの「オクスホルト」の大學校だいがくの「サンスクリッ  
ト」プロフエシヨル、マクスミルレル氏等らニ面めんをるご  
とニ釋あつ氏しの墳墓ふんぼを何なにをニ在ありやと尋たづね—み「オルデ  
ンブルヒ」ペトパーフバトリツチ「エ」の二氏にの云いわる  
、よハ我われ等ら在ある印いん中ちゆう百方ひやくほう之のれを偵尋ていごんせ—らども佛ぶつ  
墓ぼの所在そんざいハ遂つひニ知しれざり—也又またニ「マクスミルレ  
ル」氏云いく我われの未いまニ印度いん急きふハ參まらざれども多年たうねん印  
度學いんどうがくニ従事じゆうじ—居ゐる故ゆゑニ佛墓ぶつぼの何なにれニ在あるやと吟味ぎんみ  
せることニ實じつニ之の色いろを勤とわたりと云へども未いまニ其  
の有あり無なしを決けつすること能あたわざる也とて何なにれも皆みなな墳

墓のとも偵尋を可らざと云われ也今此の土人アデレツフエ氏の話尚不然るときに到底偵尋をるの難しと云ふことハ思ひ合せて徴せらるる也扱て鋼買を留在をること既又七日アデレツフエ氏の話も槩數之れを聞き取りたまども何と申をも教法學に於て素人のことなれを宗教上は就ての眞の實際ハ詳明なり難けきバ爰ハ先づ去る可しと思惟しければ余アデレツフエ氏に向ふて云く全く貴氏の高庇に依りて印度内地の事實略不其の槩數と得たれを我れ等是れより内地に入るの針方之は

過ぎたる嘉祝ハ死き也其れは就て明日ハ一と先づ此の地を發せんとを抑も内地に入るは何れは路を來るを便とをるやと尋ねけきを主人の云く之はより内地(中天竺)に入るふ二路有り即ち一路を右の方「パンウエル」より「ボナ」より出で、中國(中天竺)不行く路有り又と一路ハ左の方「ゴルリア」子より「ナツシツク」出で、北天竺に至り然して后ち中國不行く路有り然るは右ぎ「パンウエル」の方ハ其の路近しと云へども太と嶮難ありて或ハ草賊の人を害する少なからざ其の上を猛獸毒蛇の害アデレツフエ

氏云く凡そ五天竺の人民年々この獸蛇の爲めは害  
せらるる者殆ど七八百人に及ぶ實は如何んともを  
可うらざる國難なりありて往々其の害は罹る者亦  
た太ど少なりらざれば此の通路の如きは土人尚不  
之を難んぶ況や他邦の人にして中々通行困難  
なれを思ひ止り玉へうと又と左り「カルリアー子  
より「ナツシツク」の方へ太だ迂路なれども此の行路  
の如きはいさなど困難も多うらざれを庶幾は此の路  
より行き玉へうと云われ故に即ち同氏の教へ  
の如く左り「カルリアー子より發せること、決りたる也

同十七日午後第七時三十分鋼買港の「バイクラヤ」と  
云ふ「ステーション」より航車に乗り即ち左の方「カル  
リアー子」の行路に向ひたり即ち車中路傍の村々を  
點見せると其の人民の居住たる宛も曾て實見せし  
露西亞の村々民居の卑醜矮陋なると少くも變ること  
と無く之を比を我が日本の山里に住み古び  
たる百姓の家居こそ余程と上等(是れまで世界中を  
歴見せし)は何れ一つ日本の勝まさと思ひしこと一  
つも無くありしは天竺に來りて初めて此の者あり  
天竺の委靡思ひ合を可なりと感ぜられり

又た或ハ其の四方を見渡せば曠野の茫渺として其の遠涯と究むること能わざる者ありて(此の野の幅實宛も日本全國位ひの大さ程ありと思わる)其の地頗る乾燥ふして殆ど沙漠と其の雄を争わんとせざる沙色ふして其の所々は躑躅や五月木の如き木が河原蓬の濱邊にころころたる如くころび植まころついで有るを見るの外は樹木としては更は之れを見るること无き也然して其の往々在る所の石面を見るに皆な悉く黒く焼て宛も火事場の跡の石の如し之れを以て天竺の暑さを測り知り玉ふ可き也

午後第一時頃鐵路悠々殆ど倦怠の思ひをなし居まし所車中の丁夫(此の丁夫は頗る英語を能くを來て慰して云く長路悠々たり定めて倦厭し耐え玉ふざる可し我れ且く諸君の爲め天竺旅行の憾心す可きを述べ可し抑も此の天竺の國たるや即今亦て其國力大ひに冷落して民庶太た貪黠なり是を以て草賊細盗山野幽僻の間に出没して時々行旅を砲害して其の素装を掠却するありて内外の人々此の害に罹る者ただ少なうらざる也諸君は遠方の旅客深く憾心せざる可からざる也其上る殊に憾む可きは

天竺行記 卷之三

此の鐵道線の大賊あり此の賊や百人或ハ百何十人  
各々馬小跨り銃を持し夜間小乗ドて此の鐵路の脈  
線を抜き去り羸車を一々粘著拘止せ令めて直ち小  
其の乗客を砲擊鑿殺して一人と剩を所無く悉く其  
の旅装を掠奪して去る宛も忽として煙の消るるが  
如く其の痕實小踪を可からざる也嗟呼曠野遼々  
り印度政府と云へども之れを如何んともをる能わ  
ずと聞く其の狼戾慘虐の太き實小名状す可からざ  
る也此の賊や六七年の間たふと或ハ一度ハ發現し  
て大ひは通行の人民を害するおと有る也是を即ち

鐵道通行の人の深く戒懼す可き所なり蓋し竊賊の  
あらざる邦と之れ死しと云へども印度の如く此の  
賊の最も多き邦と亦た有らざるかと是れ小依て之  
を云へば印度の冷落實小徴をるは足るなりと云  
云龍云く邦の頽廢意外の不幸を生を鑑す可き哉  
鐵道漸く進んで往々村落の有るを見る小馬牛の休  
憩をる者十の中か六七匹ハ皆な河中小沈卧して首  
丈け出し々居る有り即今ハ十一月の十七八日小  
て世界一般何れの邦に於ても仲冬よりして時侯太  
寒烈なり然る小印度の馬牛此の如きの休憩を為す

我々等世界中の大数の歴経せしものども此の如きの  
奇観の未だ曾て之れを見ざる所なり嗟呼世界萬象  
の異同の温度の強弱は依て然る者といふ云ひ乍ら餘  
りの奇観なるが故に爰に記をる而已印度の熱國に  
る推して知る可し是れより經る所の村々等實に記  
するふ違ま有らざる也

十九日午前第六時漸く北印度のアルハバト府に達  
し即ち「アルハバトホテル」と云ふ旅宿に投篋翌二十  
日所々見物せしども別は案内者の我れ等を誘ふ  
る人も死ねを何を見ても頓とさつわり解らざ折角

不善惡俱非の三境に對し乍ら其の能縁の三心是れ  
の印度「ヒロソフイ」中物を見るに就て起る心の  
實際なり他日便を埃て辨む可しを起す小由し死く  
唯偶然と一々日の將に西小春んとす頃即ち旅宿  
に歸りたり然る小前日は英國に滞在して此の印度  
行の末を話せしとき英人皆云く即今印度全國  
を舉て我が英國の版圖中なれば都府人民の素より  
論無く仮令に僻陋陋巷の細民に至るまでも我が英  
語を話さざる者殆ど死き位ひのことなれば君等若  
し印度は行の勤めて英語を以て入り玉ふか」と

云へれし故も即ち英語の黒奇雄二あり獨逸語の我を何を大丈夫なりと自ら信じて參りし此のアルハベト中も於て英語を能くする者僅少にして案内者さるも傭ひ兼ねる程のおとなりし宿の主人の太だ聊の之れを話し得るも付き何卒ぞ印度人ふし々英語を能くし且つ印度の歴史も通じたる人あらは我等が為め傭ひ玉われしと依頼せしるば主人云く此の地の太だ不學な所も到底貴望の人へ之れ死しとのおとなきを其れでい仮令ひ久しく爰も止まるも遂に死益なりと見占し故も速

も爰へ去る可しと決したり爰も於ても所々ふて釋墓の所在を試問せしども更不知る者一人も死き也  
翌二十一日午前第七時アルハベトステーションより轎車に乗り又た々々長路悠々かの有名なる鉛絶嘶なる恒河の水流は浴ふて東南の間だも向ふて走る此の日天氣牢晴も一日中の温度殆ど日本の大暑よりも尚不惡や小暑く思われしなり午前第三時頃「ミルシャール」と云ふ都府に至り宿を是も亦も英語を為すもの太だ希れし何ふ事を問尋し

も更さら不り了り辨べんをるを得えむ釋ま墓ぼのこを尋たづねても知る者亦やた一人も无なき也故ゆに止やむを得えむ翌あ二十二日午後第一時「シルシャール」を發はし又また恒ごう河がに浴そふ東北の間だ小走こまり遂すに恒河の南岸なる「ステーション」に至いたり爰こゝに於おて下くだり乗ませし小數名せうすうめいの案内者此の案内者ハ各々英語を為なし競きひ來きりて云く是こゝに是こゝに即すち北印度中有名ゆうめいの大都會たいとくえいたる比拿力府べにりきふとい爰こゝに庶幾しよけいハ來き宿しゆくあらんおとを依よりて其の一人小旅装せよまじやうを托たくし即すち津頭つとう小船を備そなへ乱ごれ恒河を渡わたり北岸きたんに達たつしたり其こゝより行くこと一里余よ英のマイレ）小一こ比拿

力府りきふに至いたり即すち「ホツルス、ホテル」と云ふ宿しゆくに投なげたり此の宿しゆくなる家いへハ印度風いんどふうの構こう畫えなれども太おた爽さう大おほく暑熱しよねつの憂うれは死しかる可べく加かふる主人亦しゆじんた英語を能あたくすれむ百事ひゃくじに就つき其の調査ていさの都合ごうごも宜よろしうる可べしと思おもはる也是れまぐの所々ところところの宿しゆく々々々々て印度の「ライスカリ」土人どじんの食くは一いて實じつに好味こうみなり他邦たはうの「ライスカリ」等らうらの及およぶ所ところは尤なほ非ひざる也而已のみを食くせし爰こゝに至いたりて始はめて又また洋食やうじきを呈ていせらる其の宰さい忽い少すくくも歐洲おしやうに讓ゆづらさる也翌朝あくるあさ主人我々しゆじんわれらに向むかふて君等きみらうも何なにも邦くにの人ひとありて



爰る何の爲めは参られしと尋ねらるし故は余  
鋼買の「アデレツフエ氏」は答ふ如く話せしるは主  
人大ひは喜で云く然らむ君等の日本の人なるか日  
本人の此の印度ふ来りしおとい未だ聞かざる所ふ  
一々實ふ珍らしき邦の人々なる哉其の上は我が本  
國の佛教を信奉して爰は来りて其の佛教興廢の事  
實を調査し且つ佛墓の所在を尋問せんとせらるる  
こと實ふ感銘の至りふ堪るざる也我れ等及ぶ丈け  
の補弼は爲し参らむ可し何んなりとる遠慮なく托  
せられしといと懇ふ云れし故はさきとよ別ふ

六つヶ敷きことよ非ざれども庶幾くの最も土人  
よして英語と能くし且つ又は印度の歴史は通じた  
る人を雇ひ玉わり度しと云ひければ主人の云く其  
のことなきは我を少く考ふ有り一兩日の俟ち玉  
る来り調べ参らむ可し其の間だの衰壞せし都府ふ  
れども釋尊の古跡等も少あらざれば所々見物し  
玉るしと云われし故は即ち其の意は從ひぬ  
扱て翌二十四日ハ午前第八時頃より宿の男少く  
英語を話しを案内者として先づ此の都府中王宮の  
類蹟を初め各國諸侯の舊館印度封建政治の時諸大

名の交代在留せられ館舎なりと云ふ也等を巡覽  
をるは何れも皆敗壞相ひ谷り僅に細門小舎の遺  
在せると其の茂樹喬木の寥々を見るの外り他なき  
而已嗟呼印度の衰敗何ぞ其れ爰に至れるや然るは  
我が日本の如きハ幕政の敗れ諸侯の斃れハ却て  
王政大新の國榮を擧ぐるは在りと云つども今印度  
の如きて王政の止み諸侯の頽るハ則ち英國の財  
政を充たせよ歸して印度經國の大軸と云ふ者ハ去  
て他國の有となる嗟呼印度の不幸何ぞ其れ爰に至  
れる然して我が日本の華族(大名)ハ皆ふ之れと東京

は引き集めたまども印度の華族の如きハ皆な之れ  
を其の舊領地ニ居ら令むと云ふ也是れ即ち政略上  
の同異よりして他日何れり得失あるや識者ハ非ざん  
を知る能わざる所あり其れハさて措き其れより「ア  
ストロノミー、キル」ハ天文の寺及び「ゲルデン、ツルム  
黄金の寺」アツフエ、キルハ猿の寺等諸せし也此の  
中「アストロノミー、キル」ハ土人之れを稱して  
天文寺と云ふ此の寺ハ石を以て組建たる者よりして  
其結構の堅緻なる今日歐洲ニ在る所の石造形の王  
宮や大學校の如き者よりして全構悉く石造なり此の

他は石造及び煉瓦造の古屋等の所々に見れ  
バ今日歐洲の石造瓦造の大原も是也亦と印度の文  
明と共に西したる者と思わる也是也即ち釋尊曾  
て人民の日用百事を就て親く時間を指示を為め  
此の寺の屋上より於て天文機械十數有り皆大なり  
を陳列する也然して其の陳方たる全く「ルドルド、ポ  
ル」(北極)を原として組建たる者よりて人苟も之れを  
向ふを一年及び一月の日數より一日の時間に至る  
まで賢と死く愚と死く一目了然たらざること死く  
實は巧みなりと云ふ可き者あり然して其の機械(此

の具各々其の度目を彫在せし)たる皆な石を以て之  
れを造製し其の大き皆丈餘よりて實は壯大なる  
結構なり是即ち「ソニ子、ウォール」の日時計にして  
今日我々が携持する所の時計の大原と云ふ可き也  
嗚呼三千年前の昔此の如きの備具を為を釋尊の  
大識果して信徴を可き哉抑も古代の人民たるや「ソ  
ン子、ウォール」の日時計「サンド、ウォール」の沙時計及  
び「ワッセル、ウォール」の水時計等を以て其の當日に  
適用せしと云ふことい歴史上は邈然之を傳ふる  
と云へども其の改進の秩序は於ては容易し之れを

知る可からざる也(チモチーセン氏云く「ジー、チヤイ  
ト、デヤ、エルヒンドング、デヤ、ウォール、イスト、ニヒト、  
ゲナウ、ベカンテ」と云ふて時計の發明せし時代の密  
よハ知をぬと云ふ意也)然るは百二十年頃「レーデル  
ウォール」(車時計)にして今日の回轉時計なりと「コレ  
ステル」に於て之を發明し又は百四十年の頃「ツ  
ルム、ウォール」(塔形の時計)を「ストラースブルヒ」に於  
て之れを發明し其れより后ち千五百年の頃「ペツテ  
ルヘーレ」氏に「ニルンベルグ」に於て「タツセン、ウォー  
ル」(袖時計)を發明し及び千六百五十八年の頃「アイク

ハンス」氏に「ペンデル、ウォール」(振時計)を發明せし等  
よ依て時計の開進駁々として今日に達することを得  
たりと云へども蓋し此の寺の時計こそ世界一般  
の大原と云ふ可き欵次は「ゴルデン、ツルム」(黄金の寺  
)に至りし也土人云く此の寺を釋尊存在せしとき各  
長者等が集りて建呈せし者なりと然るは此の黄金  
の寺に就て歴史を以て之れを見るときハ凡そ全  
地球上に於て二つ有りと云ふ也其の一ハ此の印度  
の比拿力府の「ゴルデン、ツルム」是也又は其の一ハ  
緬甸國の藍古の港に在りと云ふ也然るは此の比拿

カ府の「ゴールデンツルム」の其の寺の屋根二つ有りて  
其の一ハ二丈五尺計りありて其の周圍凡そ四丈計り  
有り又と其の一ハ其の高さ一丈五尺計りありて其  
の周圍凡そ二丈餘も有る可き也然るは其の二個の  
屋根を葺くは黄金の板を以てして其の板の厚さ八  
分竹尺なり下も之れは倣計り長さ四尺餘り其の  
幅ハ一尺二三寸有りて其の金色たるや最も真の黄  
金色にて我ガ甲州金よりも尚る真黄金色なりと思  
わるゝ也然るは「コンクレート」日本計りのことと考  
ゑて居ることの考ゑを以て之れと云へば我ガ邦の

金の鱗など金細工でも世界第一の壯大なる者ハ有  
らトと思ゑども之れを廣く「アブストラクション」總  
て世界中を考へ亘ることの考ゑを以て之れと云へ  
ば印度や藍古に於て此の如き金細工の壯大なる寺  
が有るはも關らば我ガ邦の此の金の鱗こそ即ち世  
界第一の壯大なる物なりと自ら極めて前年有名な  
る奧斯土利國の大博覽會を遙々持ち出せしこと杯  
の如何は知らぬが佛けといふ云ひながらも餘りあり  
ても塊然たる「コンクレート」の考ゑなりと云ふざる  
を得んや此の如き狭小なる考ゑを一日も早く放却

せねむなりぬと云ふことと深く心底に感悟せしぞ  
かゝ次は「アツフエキル」は至るを丸く猿猴の多き  
六七千匹も有る可しと思はる嗚呼名を實の賓なる  
哉此の寺も昔釋尊の建つる所にして此の如きの  
猿猴ども原と佛徳を欽して集りて者と云へども是  
れを必竟して野人の口碑にして別は來る所先きな  
り以上の寺々を本と皆な釋尊の建る所と云へども  
今日ハ悉く「プラマ」宗の所有となす也是をよを歴  
史上の説ありて實は悲慨の至り耐るざる也今日  
ハ先づ之をふて旅寓を罷り歸り也

晚來主人余が席に來り云く兼て尊托の一人漸く之  
れを得たり名づけて「ラインズ、チャン子ル、バ子ルゼ  
」と云ふ也此の人を年一既は六旬にして印度の歴  
史に通じ兼て英語を能くそれを先づ試み之れを使  
用し玉えりてと云われ故に即ち同氏を傭ひ之れ  
より日々印度實際専ら釋尊滅后の實際等なりのこと  
とを歴史上に採聞したり此の書き采りたる者遂に  
數卷に及ひよを今爰に之れを枚舉するに耐るざ  
る也他日便を俟て述を可き也

釋尊墳墓偵尋の話

一日余「バ子ルゼ」氏に對して云く余曾て玄奘の西域記を讀んで此の邦の幅員其の時の民數宗旨の大小等ハ粗ク之を知るは足ると云つども單純なる僧家の筆法少く世は遠くと云とざるを得ざる其上の復た既小千有餘年を経過しこれを今日の事實を知る由く无き也頃日幸は獨逸の「シラーギントワイト」氏の印度旅行記を讀むは即ち「テヤランド」ヤフト、デヤ、コルトア、ウント、ジツテン、デヤ、インヘルビンドング、ミット、クリマーチーセン、ウント、ゲオロギーセン、ヘルヘルトリスと云ふて即今此の印度の地理

と氣候の間小於て住む所の民人の社會と文明と及び風俗の繁數の如きは頗る之れを知るは足りし也然るは今亦た自ら來りて爰小跋渉し更は氏の説明を聞て益々其の詳明比考する所ありて我れ等歸朝の上るは必む大ひ小其の爲を所ある可きの秩序を得たり實は氏の嘉貺と云とざるを得んや此の上る小は氏若し釋尊の墳墓の所在を知り玉まむと懇小我も小告げられは假令ひ千里の遼遠と云つども我も必む詣至せんとす也と云ひしを氏云く余不肖と云へども他事なれは如何やるとも對辯を致す可くなれ

天竺行記 卷之三  
ども釋尊墳墓のこと我れ等五十年來此の印度不  
住在と云へども未だ其の何れ在りと云ふこと  
を聞ざる也凡そ三千年來の今日ありて之れを偵尋  
せんことと太だ甚ど難る可き也寧ろ曠日累久徒  
煩勞せんより知りむ他の古蹟等を尋ね玉わん  
もと云これし故と余云く去れむとよ此のこと我  
れ歐洲に在りるとき諸の識者達と熟計り前日は  
鋼買港に着せるとき「アデレッツフェ氏」も訪求ねた  
りしは何も皆な知れ難しとのことなむども當府  
に鋼買より既に千數百里英の「マイル」も印度の中

央に在る有ればよも知れぬことの有るまどと思  
ふて尋ねしぞあり其の上名日本開闢以來東門の爰  
に來る者全く我を以て大始とすれば之を求む  
る亦とも亦た是れ我が本分とをる也若し其の墳  
墓の失亡せしとならむ責めて其の在りし地方  
も示めし玉ればかして種々の地名西域記釋氏要  
覽名義集等その他の書典に散在せし所の地名を舉  
て咨問せしかども我が稱する所の者も總て釋尊在  
存のときの「サンスクリット」古代の梵名なり然るも  
今より千有餘年前に比耳西亞等の他邦の言入り





來りて土語と混成してより以來印度の話し方遂に  
今日の變態に至る之れを「パリ」と云ふ也の名なれ  
バ「バ子ルゼ」氏さるも之れを解することの能わざ  
き互に邀然として殆ど其の針路を得る由し死  
き至れり是に於て余卓を撃て歎して云く今我れ  
の爰に來るに即ち是れ千歳一遇なり我れ尙し容易  
に此のことを烏有に屬せしならむ誰か又來りて  
之を踪をる者あらんや丈夫苟も斷つて爰に來る氏  
ありて之れを知らずむ氏其も之れを措け我れ豈に  
飽氣ならんや我れ印度二億五千萬の人を計りて責

めて其の古蹟なりと必ず實乎ね參らむ可しと  
云へバ「バ子ルゼ」氏も少しの蹙然の色を現し且  
くの沈止し居られしが稍やありて手を摩して云く  
嗚呼師が素望の岸然たる實に感餘りある哉故に我  
れ亦に囊を叩て之れを思惟するに五年以前のこと  
なりしが即ち爰に比拿力府の「チャイトング」新聞に即  
今中印度に於て釋氏の墳墓を掘り出しと尋ね  
出だせしと云ふことの有りしなれど何を云ふ  
も新聞上の記説にして然も數百里遠外のおとなれ  
ば左のみ意を注めざりし也師若し試み行あんとな

天竺行記 卷之三

らバ宜く中印度入りて之れを尋ね玉ふし或も  
千一も之れを得ること有ん歟然し乍ら唯だ  
師の意小任も可き而已果して然らざるときハ師其  
を我ガ杜撰を咎むるおと勿れと是に於て我れ粲然  
として笑ふて云く氏憂ふること勿れ我も自ら行て  
自ら過る即ち何んの氏を咎むることウ之れ有んや  
然りと云へども今此の氏の一説こそ即ち是を烏有  
中の一針小して凡そ其れ烏有に依らざるバ真有に  
達せらるるもの數なり我も必を氏の一言に依  
て行く可し氏其れ憂ふるおと勿れと云ひけむを

子ルゼ「氏も大ひ小安心致されし体にて云く然ら  
バ師仮令ひ行くとも今且く爰に留筈し玉ふの」と  
我れ即ち云く諾我も今且く留りて尚不咨問ること  
も有る可しとて此の日も是れまで散じたり  
以下印度の「クリマ」及び内狀等  
一タ余「バ子ルゼ」氏は問て云く抑も印度の「クリマ  
」氣候たる果して如何程の溫度にまで昇るものと  
をるや即今既十一月の末にして我も等日々彼此  
の間不徘徊する午前第十一時頃より午後第三時  
頃まで蒸熱日本の大暑の如し焼くか如くとて

天竺行記 卷之三 三十三

歩行ハ困難ナリ此の分なむ暑中ハ如何不どの  
温度小まて昇るものなりヤ「バ子ルゼ」氏云く我ガ  
邦の温度たるや極暑中ハ高きハ即ち百四十一二  
度不及び人皆な云く本年ハ餘ほど暑しと云ふ也又  
た低きハ即ち百二十四五度より止む人皆な云く  
本年ハ甚ど暑るらむとなり日本など大暑中ハ  
大体いゝやど昇るものときるや余云く我ガ本國の  
如きハ九十四五度は達するを非常の極暑といへ人  
皆云く蒸熱太甚だしと然るは我ガ日本人をし  
て此の温度小達し令めむ必を擧げ焼死を可し宜べ

なり頃日艤車曠野を過りしとき往々石面を見る小  
焼けて宛も火事場の石の如し皆な悉く黒色を浮帯  
せり今氏の説を以て果し徴をるは足る也  
「バ子ルゼ」氏云く我ガ邦の如きハ暑さハ即ち暑し  
と云へども四季の草花ハ同時ハ咲きて少くも四季  
小潤をること死く之れを殖えさせを常時ハ芽  
を茁し花笑いて時といへ花の有らざること死き也  
然して中印度より東南印度西北印度の如きハ乾野  
確地多くて東南印度の如くハ物の出来ぬありの  
如きハ一年間ハ三四回づ、獲收をるを以て常とを其

の他の菜蔬の類不至るまで蕃殖充物して少くも欠  
 所あること死し之れを以て我が人民の幸ひとする  
 所あり豈に他邦人民の耘耕過勞して僅かに得の類  
 ならんやと云云龍竊るを以て是れ即ち住めむ都  
 と云ふもの歎然し我々を以て之を云ふときも假  
 令ひ三回の獲收ハ四回の榮を得るとても此の如き  
 大暑の邦又住むことを能ふまじき也前日獨逸に  
 在りしとき「オルデングル」と印度のことを委く記し  
 たる史なりを見らふ云く印度の如きも蒸熱の邦な  
 れども其の黍稷の蕃殖は於てハ全世界中其の比死

一と云ふも可なりん歟其れ故に人民の將欲に甚だ  
 流擧して敢て他を求るの意死さざらば故に其の人民の  
 性質の「チーフ、デンケン」として唯だ内のこと計り少  
 名を深めて他邦に向ふての方略對交等のことハ少  
 しむ之れを持つこと死く其の上元蒸熱の爲め小間  
 さえ有れば懶眠をること而巳樂んで居る故に人  
 の氣力と云ふ者が早く衰萎して何おごとく長く之  
 を保持するもと能はざる故に折角は開けた文明  
 も早く衰え去つたる者なり即ち亦た「ガキヤモニ」  
 ブジイスマス「釋迦教」の教名の如きも意外に早速に

衰えたるを蓋し亦た此の理に依ること死んやと云  
云せり龍云く此の「オルデングル」と云ふ人もザン  
スクリット（古梵字學）の博士にして余獨逸に於て屢  
か此の人を面ぜしむ此の人印度に留學をること數  
年にして其の見る所の實檢説なきを今諸君の印度  
を見る為めの一片の参考に記呈する而已  
印度は於て除く可からざるの國難  
余「バチルゼ」氏に問ふて云く余曾て英國に在りし  
とき「チールガルテン」の動物園に行て印度の獅子猛  
虎及び毒蛇（長さ七尺計り）周圓七八寸も有る可しを

見る小人皆な云く此の三獸を印度人民の如何人と  
も為る可からざる所の三害物なりと今尚不果して  
然る歟氏云く去きむとよ此の三獸は我が邦國初に  
來の害物にして民人の之れを罹りて死する者年毎  
は殆ど七八百人に及ぶ也君見ずや彼の銘絶斯河の  
左右に邈たる曠野ありて往々數百里の藪原を見る  
其の中にお猛虎を棲生す（日本に於て竹小虎と云ふ  
諺の來る蓋し爰に基くならん歟）其の數を幾く百と  
云ふことを知らざり又獅子は有名なる喜馬拉山中  
に蕃生し四方の群山に移住して彷徨喫啖たる是を

天竺行記

卷之三

三六

亦た如何と云防正を可あらざる也又た毒蛇の如き  
大野と死く山と死く隠見恒死く人を見きむ必ず糖  
探する宛も丸を飛バを如し苟も一度之れ不觸る  
るときハ立は即死其の害實小獅子猛虎よりハ太  
きもの有るなり此の三つの物の政府と云へともカ  
ラ之れを除去する能ざる所ハ我が邦永遠の  
大害物なり嗟呼果して之をクリマの為を所とせ  
ん歟未だ何者の所為たることを知らざる也然し我  
が邦の人民の如きハ槩ね此の害を逃るゝの憾め方  
を知るに云へども今諸君の如きハ他邦の人殊は佛

墓搜索の為めハ如何なる地に至ると計る可うら  
ざきを深く注意し玉えうと  
「バ子ルゼ」氏云く其上え我が邦ハ恥う一乍ら小  
賊大賊の多き邦よして行旅の此の害は罹る者太だ  
些少なれば是を亦深く注意し玉えうと余  
答て云く其の委詳ハ頃日艤車中は於て之を聞く  
今亦ハ氏の言は依りて益々徴する所あるを深く憾  
心を可し氏其れ之を安んぜよ氏の懇到ハ我を等  
死事を保つの方針なり實は感荷ハ耐えを謝し  
り龍云く邦苟も費藥するときは人民爰ハ至る嗟呼

天竺行記 卷之三  
恐る可き哉

「バ子ルゼ」氏云く貴國日本を指すの如き也即今文明日々小開進して萬國と對峙するに足ると實小欽然小耐えざる也然るに我が邦の如きを衰爛爰小谷り全國舉て英國の所領となり我が民人の苛政は苦む未だ今日より太だ甚きハ有らざる也今其の一を以て之れを云つむ鹽の主權法龍曾て漢の汝南の桓寬の鹽鐵論を見る小漢の武帝の時此の鹽鐵主權の法を行ふて官専ら鹽鐵の利を占めたること有り主權とハ已き獨り其の利を收むるの謂也今英國の鹽

小依て専ら其の利を占る者宛も漢の主權法小似たる也然る小漢の主權法ハ唯だ其の賣り方を管する而已よして其の價ひハ平常に異なること無し今印度の如きハ其の法非常の價を倍取を實に苛虐と云こざる可けんや是れ也是れ即ち此の法を以て印度全國の鹽の價を統一して英國財政の收入を計るもの也即ち其の價を云へむ印度の「ロピ」(天竺の壹圓)の十分の八分五は當る也此の中其の一分を以て正しく其の價とし其の七分五ハ之れを求むる為めの印紙代とをる也槩して日本の金を以て之を云へ

天竺行記 卷之三  
三

ハ拾錢を正く鹽の代價となり七拾五錢を之れを求むる為め小添出を可き印紙代とある即ち惣計をねむ鹽壹合の價が八拾五錢の位小當る也其を鹽を得るの貴き既爰に至る其上を我が邦の如きを幅員廣大にして海輪遼遠をきむ鹽を得るの路この苛法に依るの外更に他方なき也是を以て我が細民の如きの苦考密案して窃りに山土や樹葉等を煎て少一の鹽を采る小其の事苟も發現をるときハ忽ち重懲役等小處せらきて家族擧て遂に饑餓小倒滅する者往々少からむ鹽の為めは苦む者亦た復々爰

不至る也其の他の國稅地方稅及び諸運上等の如き從ふて其の倍獲を推て懲察し玉忽り是を以て我が人民の如き其の勞力小得る所の者ハ他分え之を公に收めて其の残る所の者を以て僅々我が一命を活ぐ而已其上を英國の威武に統壓さきて朝の起床も英國の大砲夜の卧床も英國の大砲唯だ大砲々々の響の内は怪怛して少くも安心の位地を得ぬぞ一嗟呼何ぞ英人の苛戾ある嗟呼何ぞ我が人民の不幸なる實は悲慨の至りは耐えざる也之を不就て我が土人窃かよ以為く若し兵力を以て此の挽



回を計らんよと英國兵敷の嚴密堅緻なるとても我が  
 微力を以て之を為さんよ却て一層の大害を惹起  
 せん如くぞ先づ我が文明を發育して然して后ち之  
 をを計らんよと思ふどもさしり今日の虐政  
 を如何せん哀を我が國情を憫察し玉えうとの親話  
 を聞ひて余も亦た坐るよ悲慨の思ひよ打ち沈みり  
 印度の代言人

「バ子ルゼ」氏云く我が印度の如きも亦た訴訟裁判  
 了就てハ四局(勸解初等上等大審院)を設立して其の  
 裁判上の形ちよ於てハ備具ハ則ち備具をと云へど

も其の實際の如きも之を如何とも云ふ可からざ  
 るの情實ありて人民の惘悼實ハ惟れ谷まる也如何  
 となきを其の裁判官ハ減を崇んで法を枉げ代言人  
 ハ利を逐ふて人を眩し細民を衆を比して姦を計る  
 を以て也然して其の災原を云へバ獨り其の裁判官  
 又在る也如何とわれ我が邦の如きハ温度の高き  
 百三四十度小昇りて蒸熱實ハ太だ甚き故よ他邦  
 の人の來り住むの邦ハ非ざる也然るよ英人の如  
 き好んで來住をる所以んの者ハ唯だ利是を見り而  
 已且え本邦(英國)ハ遠遠よして事多く曖昧ハ附する

も敢て之を咎むる者无きむ入滅の手段太だ行こ  
き易き故に各官皆な蓄財歸郷の主義を以て來る  
也是を以て我が姦民その意を婦媮し其の代言人と  
事を附會して以て良民を擾惑し其の細民を衆を比  
集して以て良民を牽強するの間たふ於て訴訟百出  
して其の煩擾なる牧て舉ふ可からざる也終ふ之を  
を大審院に上告するも院尚不賄力を以て勝を得ま  
な姦民益々其の欲を放よし良民専ら金持に在り多  
く其の害を受けて人民の悲惨怨曠又は牧て舉ふ  
可あらざる也近來英帝より若し印度に於て其の裁

判上し就き服承せざること有るときは我が本邦に  
來り訟ふよとの令あり是を以て實に其の情に相ひ  
耐えざる者復令ひ此の上より身代を破碎せるとも  
いふも閣りきぬと云ふ情實のある者多くは金持  
に在り等或は五株六株申し合せて代言人を撰舉し  
て以て遠く數千里の彼の本邦(英國)に行り令む其の  
費用等實は莫大千萬なり之れが為めは遂に其の家  
産を破碎して斃る者天下比々少なりらざる也然  
るも姦民(代言人)益々此の弊は乘り兩國(印英)の間  
出沒して我が人民を瞞著誑引して大ひは其の利を

計る者未だ牧て擧ふ可うらざる也然して此の難は  
罹る者富人最も多しとせる也之れを以て我が邦の  
費弊日々究りて其の止る所を知らず實は悲慨の  
至りし耐えざる也と云云龍云く前日は英國の「ペオ  
コンパニー」艦よて西印度の銅買港より來りしとき同  
乗せし印度の「アボカ」(代言人)「ロツク」(クラーアロー  
ブ)と云ふ者の云く我れも今度訴訟六株を持して遙  
數千里の英國に至り留ること一年半許り(失費知る  
可し)ふして歸國せざる也との話を以て今「バ子ルゼ」  
氏の話と徴して印度の内情實は氣の毒の至る存せ

らる也之れは就ても我が日本の金持ち連中は金さ  
る有れを邦を破れても我れを即ち大丈夫なりと思  
ふやうな坪違ひの考へハ止めなさいよ邦が破れさ  
れむうろさくとも一番は難儀をみる者ハ金持ぞか  
此の印度の實況を見て知り玉ふべし其の故は家  
大事なきは先づ邦を護る可し嗟呼  
印度佛教興廢の話  
一日余「バ子ルゼ」氏に問て云く即今五印度中の宗  
旨何の宗を以て最も隆盛なりとせるや「バ子ルゼ」  
氏云く今我が全國人民の信奉せる所の者之れを「ゼ

ニズム宗と云ひ又た之をヒンヅル(印度の國教と云ふこと)と云ふ也釋迦教の如きを皆な去りて他國(北ハ西藏西ハスベリヤ比耳西亞東ハ緬甸安南支那日本等)は行き却て我が本國は於てハ之を信奉する者先しと云ふも可ならん欵余又た問て云く今氏其のゼニズム教と釋迦教と何つの頂より興廢せしと云ふことを示し玉われりしと云へバ氏云く余ハ宗旨者非ざれむ其の詳細ハ之を知らざると云へども凡そ歴史上と人の口碑は在る所を以て之を云へバ釋氏在存の時も天下靡然として其の風は郷

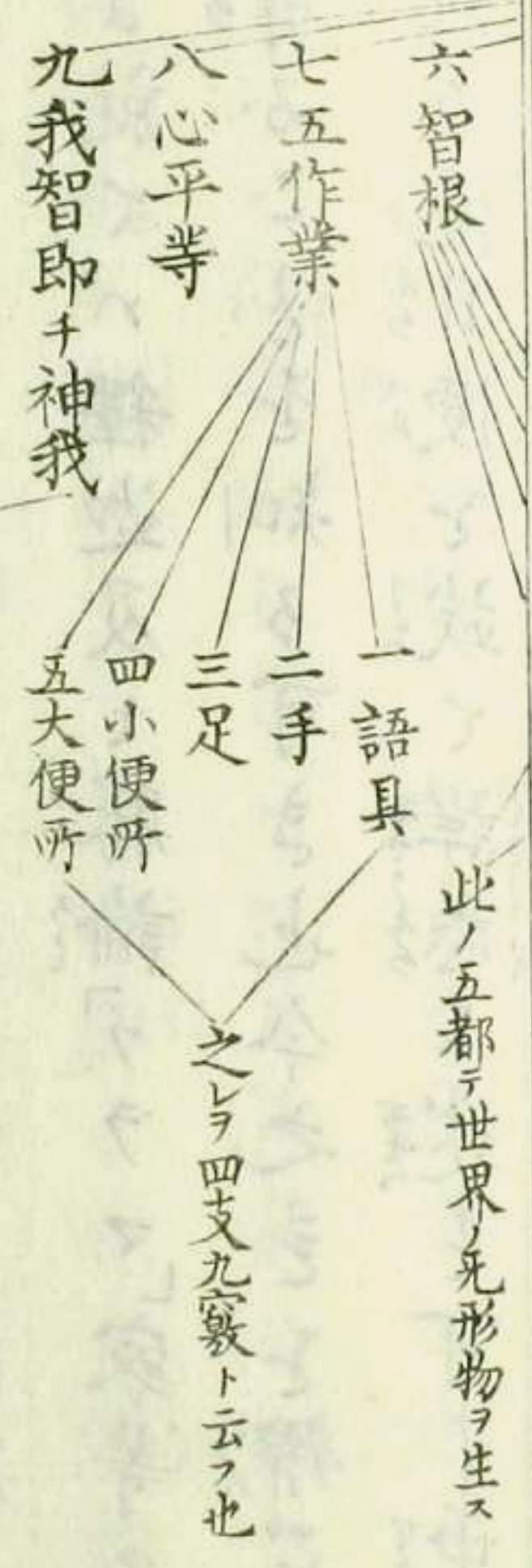
わざるもの死しと云へども佛后五百年の頃に至りて佛徒高慢自負稍や怠弛せざるの際も及んでテラマ(ゼニズム)宗の教徒涵養忍耐自ら勉むるの久き天下の人心釋迦教を放て多くもテラマ教は歸向せし也此の時中りてや兩派互に陵轍して往々諍論(或ハ其の太き大いハ戰伐も及ぶ者あり)も亘る(龍云く三十述記ハの五十九丁因明大疏三の二十八丁以下等其の諍狀を記し今氏の云ふ所粗石之れも當る歟)もの太ど少なならずと云へども佛徒一般恒は敗を采りて聲價益々落沈せり中於て一二の力ら

能く之を補く(龍云く三十述記ハの五十九丁に  
云く世親勝義七十論を造りて彼の論に對し彼の外  
道を破すと云ふ者蓋し之を當る者ありと云つ  
ども所謂大夏たいわの崩るハ一木いちぼくの支さふる所は非ざ  
千有餘年の今日に至るまで佛徒少くも之れを改む  
る所無く遂に此の委靡敗壞いびそらを來たり哀む可し彼  
の有名なる「アストロノミー、キルハヤ、ゴルデンツル  
ム」等までも皆な悉く「ブラマ」宗の所有となりて印度  
全國の教權全く「ブラマ」教に歸向せり是を以て我が  
全國の人民日々に益々信奉して此の宗を稱して「ヒ

ンヅル」と云ひ即ち印度の國教とせむ也嗟呼二教の  
興廢遂に爰に至る所以のものハ「ブラマ」教の必高  
尚れて釋迦教の必剪劣るが故に然るハ非ざ  
て全く是を之れを維持する者の力らの如何んは依  
て然るものなきを決して他の罪を非ざる也と云  
云龍曾て述記及び金七十論等を讀む今「バ子ルゼ」  
氏の話聞き思ひ合せて大に感あり我が日本の宗  
旨者たるもの深く考ふられよう然して此の「ゼニ  
ズム」宗とるや段々調査する所は依れを概ね是れ數  
論派の宗義を立る者なり此のことハ我が別記に委

く乗載したまむ他日便を跋て述を可き也  
印度「ピロソフイー」の略示

「ゼニズム」即ち數論「ブラマ」家の所立槩意を示す左圖の如く(數論家も二十五諦を立て、世の中を支配せらる也)



以上ノ二十五諦五ニ相ト生シテ人ヲ生シ世界ヲ成ス也委ク他日辨ス可シ

以上の二十五諦より由て先づ人と世界の出で来る所  
以んの大原(印度の「ピロソフイー」家之れを「ヤイナバ  
ルキヤ」と云ひ歐洲「ピロソフイー」家之れを「アブソル

「トと云ひ我ガ性相家之れを阿頼耶藏と云ふ也是  
 き等のことを他日之れを辨ぜんともる也」と知り然  
 して后ち人の真理を知り世界の真理を知りて政治  
 あり宗旨ありと云ふ真理上の次第秩序を全知する  
 也此のことも金七十論(數論)「プラマ」家の書なりを見  
 る可し今日を「ゼニズム」宗のことを云ふは就き數論  
 家の主義を示す而已此の外は總て印度「ヒロソフ  
 」家と就ては釋迦及ヒ勝論「プラマ」家等の「ヒロソフ  
 」有ることを知る可き也今之をを辨むるは違ふ  
 非ざれを他日便と跋て詳悉に述を可し中々歐洲「ヒ

ロソフ「イ」の淺薄なる類よを非ざる也然るは「バチ  
 ルゼ」氏の話より由る「ゼニズム」宗の如きは印度全  
 國に於て凡そ分れて三十餘派とあり何れも皆な信  
 奉隆盛なりと余前日は「ゴルデン、ツルム」の寺に詣せ  
 一時その拜至人の多き肩摩肩擊實小人の堆をなす  
 導人の云く毎日午前よを恒は此の如しと然して荀  
 も男子たる者と亦た必む其の額に白粉を以て三  
 ≡三三二(是れは鼻の形より引き下を)此の如き  
 線を描けり是れ皆な同宗異派の徴とをる也と我れ  
 銅買より爰は違ふ凡そ千數百里その見る所の人

苟も男子たる者ハ此の徴一を画りざるハ未だ一人も之れ有らざる也且も人民の實況を見るハ實ハ宗旨信仰の厚き歐洲と云へども是れも及むと思ふも也扱て又此の外ハ内状ハ就て土人の嫁娶出誕葬儀祭典寺の生活等より耘耕工商衣服食物及娼妓芝居等のことよ至るまで委く乗記したくそ有れども餘紙も先く亦ハ發免の遲回せんことを恐るゝが故も今ハ之を略し他日復た續編を造りて以て之れを述せんともる也先づ采り調べも粗ぼ其の概數を得たれを是れより「バ子ルゼ」氏の話の如

く中天竺の方名向ひ佛墓の所在を弔問ね參らる可しと思ふハ余「バ子ルゼ」氏ハ向ひ是れまでの荷恩を深く陳謝し且つ其の意を述べけを氏も亦た之れを許されて云く師是れより中天竺ハ向日とならバ再び恒河を乱り「アルラ」を経て「バトナ」に至り爰ふて能々尋ね玉の或ハ其の方角も解りつ可き歟と懇よ其の路次を指示されけを翌二十八日午前第七時比拿力府を發して再び恒河を乱り午後第三時「アルラ」に著し今夜も爰に宿し取り敢るも佛墓の方角を咨問せしかども語さるも確乎も通ぜさ



れば解る可きやうも死ければ翌廿九日早速爰を發  
—「パトナ」爰を即ち中天竺の入口也の方急ぎけり  
午后四時過ぎ同所に着—今夜ハ又た爰一宿—け  
れば宿主の僅ハ英語を話す由て即今此の中天竺  
に於て釋迦佛尊の墳墓を掘り出—たと云ふハ果—  
て何れの地なりやと云ふことを英語の中手合ひ  
摸合ひを雜ぜ加ゑて尋ねければ主人僅ハ其の意を  
示せ—や其れを「ハル」シラガチ—「ガヤ」の間は行て  
尋ねよう—と云ふれ—故ハ太だ便り死き答ふなれ  
ども何ハ兎も角この言を方針として行く可—と決

したり—  
以下正しく佛尊の墳墓を偵尋するの話  
翌二十三日「パトナ」を發するに付き是れまで多分  
鐵道に乗じて来り—なれども今ハ専ら釋尊の墳墓  
を弔問—參らる可ければ鐵道而已—て沿行してを  
とても偵尋の詳細を悉きこと能らざれば是れより  
ハ或ハ牛車馬車ハ之も死—を用ひ又たハ歩行をも  
為る可—と路次の行計を議定—先づ取り敢るを牛  
車一輛を備ひ「ハル」や「ガヤ」ハ西南の方—in 在りと聞  
けバ其の地方急行く可—と方針を定めて午前第八

天竺行記 卷之三 四八

時「バトナ」を發して悠々たる知らぬ田舎の方を向ひ  
つ、「ガヤ」の里をい何ふ行くや釋氏の墳墓を何れは  
在りやと英語を以て尋ねつ、山を越る水を渉り村  
あまを尋ね人あまを問ひつ、も尋ね行く程も日も  
早や西山は盡きければ今日を速く宿を可くとて山  
の手の小村なる百姓の家を叩いて我々日本人な  
る今夜の一宿をさせ玉あると英語を以て懇に依  
頼せしうども最早や此の邊を英語さるも通せざる  
まやさつをり解らぬ体に見えければ今を詮方なく  
日本語を手合ひ摸合ひを打ち雜えて述べけきと却

て其の意を了せしみや何みや解らぬ言を云ひな  
がら手を振て相ひ断る体なれば強て頼む可き術  
なれば其れより四五家も依頼せしうども如何が  
思はれしや皆な悉く断りの体なきは黒崎余は向ふ  
て云る、よとケ程までこと分けて依頼をりよ承  
引の先ければ最早や午后第十時過今夜も如何が  
玉ふや到底野宿でもなされる歎兼て承る所は由れ  
む猛獸毒蛇の怖れも有れむ如何がなされる積りな  
りや實は惘り入りますと徐々不足を鳴らし掛けら  
まし故は余笑ふて云く左而已悚れ玉とざれし我

れ必ぞ氏をして安眠させ参らる可し抑も猛獸毒蛇  
の害等の必竟トて凡人小人の悚るる所の者ふして  
大人豪傑の敢て屑とせざる所なれば令ひ彼れ来る  
とも我を必ぞ宜く處を可し氏決して悚るること勿  
れ若しや宿めて呉れぬときハ野でも山でも草蓐石  
枕何の安眠されぬことや之れ有らん都て我れは托せ  
玉急うし然し乍ら是れまでも専ら黒崎よ言ひ令め  
たり此の上を我れ我が膽略を以て數言間も宿ハ  
借り受け申さ可し氏且く笑てと云ひ捨て更ハ一方  
も行て我が天然の日本語を以て同く手合ひ摸合ひ

を振り回して依頼せしかバ速疾り承引致されと  
り是れ即ち日本語手合ひ摸合ひと云へども得失ハ  
其の使ひ方たよ在り諸君一笑せよ即ち黒崎と呼ん  
て云く見よ宿ハ既ハ借り受けたりとて相ひ共ハ其  
の家の柴部屋体の内ちハ投宿して何ハ兔も角大  
ひハ安心致したり宋の文天祥が是即我安樂國と云  
これしを思ひ合せて大笑しけれ然るハ小麦の蒸し  
たる物ハ白砂糖を掛けざる食物を與えられしが其  
の味ハ佳なること宛も漢の文叔の滹沱河の麥飯  
よと相ひ譲らざる也今日ハ非常ハ配慮して頗る疲

勞せりりべ端し無く柴部屋の内ちよ沈睡せり  
 翌朝に至り盥嗽既畢りて主人又と例の食を来り  
 呈して手合ひ摸合ひと共よ何もやらチンパンカン  
 を述べれどもさつぞり解らず然し乍ら粗末な田舎  
 物を差し出さハ氣の毒なと云ふの体よ見あけむ我  
 れ等も亦ハ英語を以て昨夜来の厚意を陳謝しけむ  
 を彼れ亦と語り分らねども粗ら其の意を解せり体  
 よて一坐の對交太ど整頓せり稍やありて我れ等主  
 人よ向ふて(英語を以て)釋迦の墳墓ハ何れよ在きや  
 又た「ガヤ」の里ハ何れの方よ在りやと尋ねければ彼

れ全意を解せざまども唯ぞ「ガヤ」と云ふ名而已を分  
 りし由しよて遙り西南の方を指して云く「ガヤ」と是  
 よ於て我れ等茫渺中よ一つの行路を得たる思ひよ  
 て深く主人の懇到を謝し其れより名さへ分らぬ  
 村を發して之れより前きハ長路悠悠々唯々手合ひ摸  
 合ひと諸共よ「ガヤ」「ガヤ」と而已尋ねつ、山を越え水  
 を涉り日落れば孤山の下よ宿し日出れむ一水の涯  
 を發し宿々既よ五宿遂よ十二月三日午後第十時頃  
 「ガヤ」の里よ着しけり(路次の苦惱等ハ爰よ詳悉不可  
 くらざる也)扱て其れより兩三家と叩ひて一宿を依

頼せしは例の如く皆な相ひ断られけまども黒崎も宿采りハ大分上手は成りたれを百方遂は一つの納家体の者を借り受けたり是は於て笈と下し坐を占めて先づ「ガヤ」まで来りし上ハ佛墓の有死も日ならざりて決を可きことの近きを悦びつ、遂は洋種は巻りきて寝りたり

正しく釋迦佛尊の大墳は詣至る話

明て四日の朝第七時起床し食事畢りて然して后ち余黒崎は向ふて云く史は云く白虹日を貫くとハ人の至精遂は達するの謂ひして凡そ人苟も精神あ



聖龍師自ら天竺ヨリ持來ラル





此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真  
推テ願ヒ別ニ縮圖ニ致シテ所望ノ人々ニ附與ス可シ

當圖ハ道龍師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生誕テ之ヲ親寫ス 壬午ニ堂録山



細家体の者を借り受けたり是は於て笈と下し坐を  
 占めて先づガヤまで來り上ハ佛墓の有死も日な  
 らどして決を可きことの近きを悦びつ、遂は洋種  
 は巻りまて寝りたり  
 正しく釋迦佛尊の大墳は詣至る話  
 明て四日の朝第七時起床し食事畢りて然して后  
 ち余黒崎は向ふて云く史は云く白虹日を貫くとハ  
 人の至精遂は達するの謂ひして凡そ人苟も精神あ

らば何事か成らざらんや我を等去日鋼買と發して  
以来爰は達する幾んど千八百七十八里も有る可  
此の間の苦心焦慮亦と果して幾子ぞや然るは死事  
遂は爰は達し得る者ハ唯だ是れ一つの精神ある而  
己氏其れ旃れと勉よ佛墓の有死を決せることハ正  
く近きよ在る也と黒崎も大ひに感奮して云く諾我  
れ將は勉めんとする也と是は於て宿の主人を呼び  
て云く我々をイヤツパンニス(日本人)おいて釋迦  
佛尊の墳墓を弔問し參らせん為り来れり庶幾く  
を御墓の所在を知らせ玉ふりと英語或ハ獨逸語

と打ち交えて陳しければともさつたり解らず黒崎云  
く此く巨細は述ると云へとも彼れ少くも其の意と  
解せざれど如何が致す可きやと云されし故は余云  
く此の上るも百事我れふ任し玉る我れ必だ問出を  
可し彼れ亦た犬は非だ猫は非だ均く是れ人なまは  
仮令ひ言説の通ぜざるも何んの其の意の致されざ  
ることや之を有らんや是は於て余自ら日本語中  
手合ひ摸合ひを差し加えて種々之れを咨問せしと云  
へども彼れ尚ほ之を解せんと能はず實は百尺  
竿頭之れと如何せんと思ふ所より一種の工夫を回

らし墳墓の形ちと画して「サキヤモニ」「サキヤモニ  
」と云へむ彼れ稍や之れと解せし体よて頻りふ點  
頭しける故は然らむ其の地方は行く可し牛車一輛  
を備ひ玉これと「ロピ」(印度の壺圓)を出して種々依  
頼しければ其の意少く了し兼ねし体おれむ是  
れ亦し牛車の形ちと画して示しけむは忽ち了解せ  
し姿よて大ひは笑ふて點頭しつゝ戶外を指して出  
て行く且しありて一輛の牛車を率ひ来り之れは乗  
れと云ふの形ちを示す然らば之れは乗れは宜しひ  
歎と手合ひ摸合ひを以て尋ねければ唯し點頭して



遙は西南の方を指ざしける故は左を其の地方  
よこそ或ハ御墓の在をならんと想察せしうを鬼も  
角試みは行く可しと卒然ながら其の車は乗れば主  
人其の丁夫は向ふて遙り西南の方を指ざし何れや  
ら云ひ付けたれを丁夫も了養せし形ちよて我等を  
引ひて陋巷の外へ出でて行く實は如何んとも云ふ  
可うらざる漠然の至りそがし是れより行くこと數  
里にして野外と轉じて山手の方を向るとをる時  
黒崎余は向ふて云く北畠君是れよりハ何所へ行く  
ので有りませやうさてハ徐々例の不足を鳴らし掛

けたりと察せし故は余恬然として云く御墓の方を  
行くの志やと彼れ云く愈々御墓が分りませしやう款  
余云く未だ分らぬの志や彼れ云く分らぬでも惴り  
入ると余云く分らぬ故は尋るのドやと一論終り稍  
やありて彼れ復と云く凡そ御墓を幾里計り有り  
ませしやう余云くさきとよ今ハ獨逸英語の力らも  
盡き果て丁夫はさるも咨問を可き術ての死れは百  
里あるやら二百里あるやら唯ど茫々として知るは  
由し死し嗟呼丈夫苟も行く可しと決したり千里萬  
里も何んの辞をることり之れ有らんや氏其れ細論

さること勿れと云ひつゝも益々山手の方へ行く程  
は午後第三時頃連山の麓へ衝き出でたる一つの土  
山の下に至りたり丁夫爰に於て牛車を止めて何  
やらチンパンカンと云ひつゝも手を振り回して車  
より下りよと云ふの形ちを為さ故に何事やらん  
と思ひつゝ車を下りけれを我れに從ひ来れと示さ  
の体かれを唯ぞ其の云ふまゝは是れ從ひ其の山の  
上へ登れを豈に圖んや土山も非ざりて宛も周  
圍二丁餘り有りつ可き大ひなる摺鉢の端の如き所  
に立つたり然して其の底を見るに宛も塔の形ち

似たる石造の建て物ありて近頃土中より掘り出  
せし者の如く尚も男女百二十三人計り土を掘り土  
を荷ひ鞆掌絡繹たり余丁夫に問て云く之れ果して  
何の物ぞや丁夫何より云へども更に分らざる故に  
黒崎に向ふて云く兼て聞く所より由れを即今釋尊の  
墳墓を掘りて居るとり云ふ蓋し之れならん歎然  
墓よりして餘りも大なる亦た塔ならん歎何れせ  
よ彼の多人數中にも或は英語の出来る者もあらん  
免も角行ひて咨問せられよと云へば黒崎即ち諾  
て直ち石階(四十五六段も有る可し)を下り彼の群

中よ入りて往々咨問せしども更に分らざ余端の上よ在りて呼んで云く黒崎果して如何ん黒崎の云く未だ一余云く速りよ勉旃よやと勵ましければ彼れの飛回ること宛も發雷の如く稍やありて彼の小高き所よ少く偉大なる黒人(印度人を皆な黒人とする)の種々指揮をるを見占て問訊しければ天幸よも彼の黒人の英語を自在に話せり即ち云く是れを斯れ釋尊の大墳墓ありと是よ於て黒崎手を擧て大呼して云く是れ即ち釋尊の大墳墓ありと余之れを聞ひて宛も狂人の如く石階と兼下りて思ひども黒崎

を懐き抱え跳て云く嗚呼大聖世尊の墳墓なり大聖世尊の墳墓なりと多日の千苦を打ち忘きて喜跳悦躍相ひ止まざれば土入之れを周匝して太く奇怪の看を為しよける也稍やありて黒長云く我れを即ち當修營所の奉行あり先づ我が修營小屋よ來り玉えりしとのこと故よ取り敢るむ其の小屋よ誘れて狂氣漸く清整端正なりさて此の所はもと加耶の聯地ふして佛陀加耶と名くと加耶の里より十二三里も有り云ふ也  
黒長我々よ向ふて君等何れの邦の人ふして何ん

の為めは爰より来りしと問ふれり故に前日鋼  
買の「アデレツ」フエ及び比拿力の「バ子ルゼ」氏等  
答る如く陳しければ黒長大い感喜いたされて  
云く然らば君等ハ日本人よして我が釋迦教を信奉  
せりの人なる歟我は即ち「タークベンゴ」と云ふ者  
ありて此の大墳修營の奉行を命（印度政府より）せら  
れし者あり之れは關せし事なれを渾て配慮し参  
らす可し何んありとも托せられしと懇に云ひ呉  
れける故に我れ等も深く陳謝し然らば何んとも  
りく先づ釋尊の大墳に詣せ令り玉ふれよと云へば

然らば我れ自ら指切を可し来り玉ふると云われ  
し故に余即ち法衣を着し經卷を持して大墳の前  
至る大墳然として其の高さ宛も八丈餘其の周  
圍十餘丈も有る可しと思ふ實に世界無比の大墳  
と云ふ可き也（余曾て佛蘭西に於て拿破倫の墓を見  
る人皆云く世界第一なりと今此の大墳は比さる  
る其の細小なる論ざる足らざる也嗚呼釋尊威徳  
の巍大なる推て知る可きあり）廻り其の墳戸より凡  
そ一丈七八尺計り奥に入る其の奥中太ど暗淡模  
糊たり然る其の正面は三尺四五寸許りの黄金の

釋尊を坐し其の下たは圍大なる穴を鐵の圓板を以て蓋ふて有り云く此の内は釋尊の金棺を收むと之れを聞き余感然として立ち法然として泣いて拜して云く嗚呼我を等六十年來徒ご佛尊の威名を聞き今日爰より來りて此の親容を拜を我を等感喜の至り且つ極まる豈は車載斗量も可んや即ち彌陀經一卷と展誦し深く大育の荷恩を敬謝し奉りつ

年を経て名のみ残りし加耶の里より大其の國と杜撰らぬ卑言と陳みたり此の中り名のみ残ると

今日みわとけの痕と問ふ哉

云ふる前日小云ふが如く古昔釋尊在存の時の山川國都の名(カンスクリツトの名)を以て何を云ふても少くも解らざ(今ハ都て「パリ」の名は變りし故に)衰頽せしと云へども加耶だけを今尚不其の古名と存るるが故に名のみ残ると云ふ也此の名が我々の此の偵尋の原引となり也其れより左の方より南門右の方より各國天子(スベリヤ「パールン」等)の建呈されし碑石(三行)なりて十五ヶ所あり之れを寫真中より死き也等を點見し畢り(之を今爰より一々乘記をりし違ふあらざれを聞んと欲する者を來れ

先づ「ダークベンゴ」氏の小屋を引取り日も西山よ  
 春まきけれを明日復と来る可しと約し今日ハ夜をこ  
 めて加耶の里まで立ち帰りさり主人も大に羨ち詫  
 びし体なまし一所その配慮より正しく佛尊の大墳  
 を拜せしことを種々形容して深く其の厚意を謝し  
 遂に納屋の内よりぞ臥したりけり其の大墳の形ハ  
 寫真を爰に繪して劉覽に附む其の中より第一圖ハ五  
 年以前に堀り出せし儘なり其の第二圖ハ五年以後  
 修營の形も也委詳ハ他日辨む可き也  
 翌五日ハ天氣晴し再び佛陀加耶小行可し

とて昨日の如く牛車と云へを主人も既み暗記して  
 直ち車と率ひ来り即ち之れを乗りて加耶の里と  
 ぞ出うけたり今日ハ昨日より打て變り生路も即ち熟  
 路と成り主丁の間も亦と知り合ひければ路も意外  
 増り采りて第十二時頃より大墳の下とまで達し  
 たり黒長「ダークベンゴ」氏も太ど羨ち詫びてぞ居ら  
 れたり  
 「ダークベンゴ」氏大墳瘞堀の稟話  
 余「ダークベンゴ」氏に向ふて此の佛尊の大墳ハ即今  
 堀り出したと云ふハ真なり歟此のこと若し真なら

を何つの頃何んの由を以て埋められやと尋ね  
 ければ氏云くさればとよ此の大墳を掘り掛けし  
 二十年前のことなまども正しく掘り出したるハ五  
 年以前のこと也然るは其の埋められしを今より千  
 九百七八十年のことよして其の所以ん如何んとな  
 れバ「サキヤモニー」(釋迦)教徒と「ブラマ」教徒の間だ  
 於て法義上の諍論と起し(此の話金七十論三十述記  
 因明大疏等の説と合して益々徴するは足る也)兩派  
 互に陵轍の末遂に印度全部の戦となし釋迦徒の  
 敗績壞散せしとき「ブラマ」徒の來りて此の大墳を粉

碎せんとするは餘り大墳の堅牢なるが故に卒然之  
 れを瘞埋して去りしと也此の時中りてや一二人  
 の力ら之れを補援する有(此の話亦に三十述記の説  
 と合さりと云へども之れを挽回すること能くを遂  
 へ今日の如く陵夷漸廢するに至れる也然るは今よ  
 り二十年前英國天子「クトロギー」(古物を存保する學  
 文なり)學の意よりて命を印度政府に下して此の  
 大舉あるに至る是れ即ち此の大墳の瘞掘する所以  
 んの槩數なりと云云此の話前日比拿力府の「バ子  
 ルゼ」氏の話と亦全く同一なり我が佛尊の大教を

遵奉する者果して之れを何よとる思ひ玉ふぞや

大墳の所在を人の知らざりし所由

余ダークベンゴ氏（ベンゴ氏）は言て云く我れ此の大墳を弔問（ちゆうもん）

の爲りよと頗る若干の勞苦を嘗りたり我れ曾て歐（おう）

洲在留中獨逸の「サンスクリット、プロフェツシヨル、

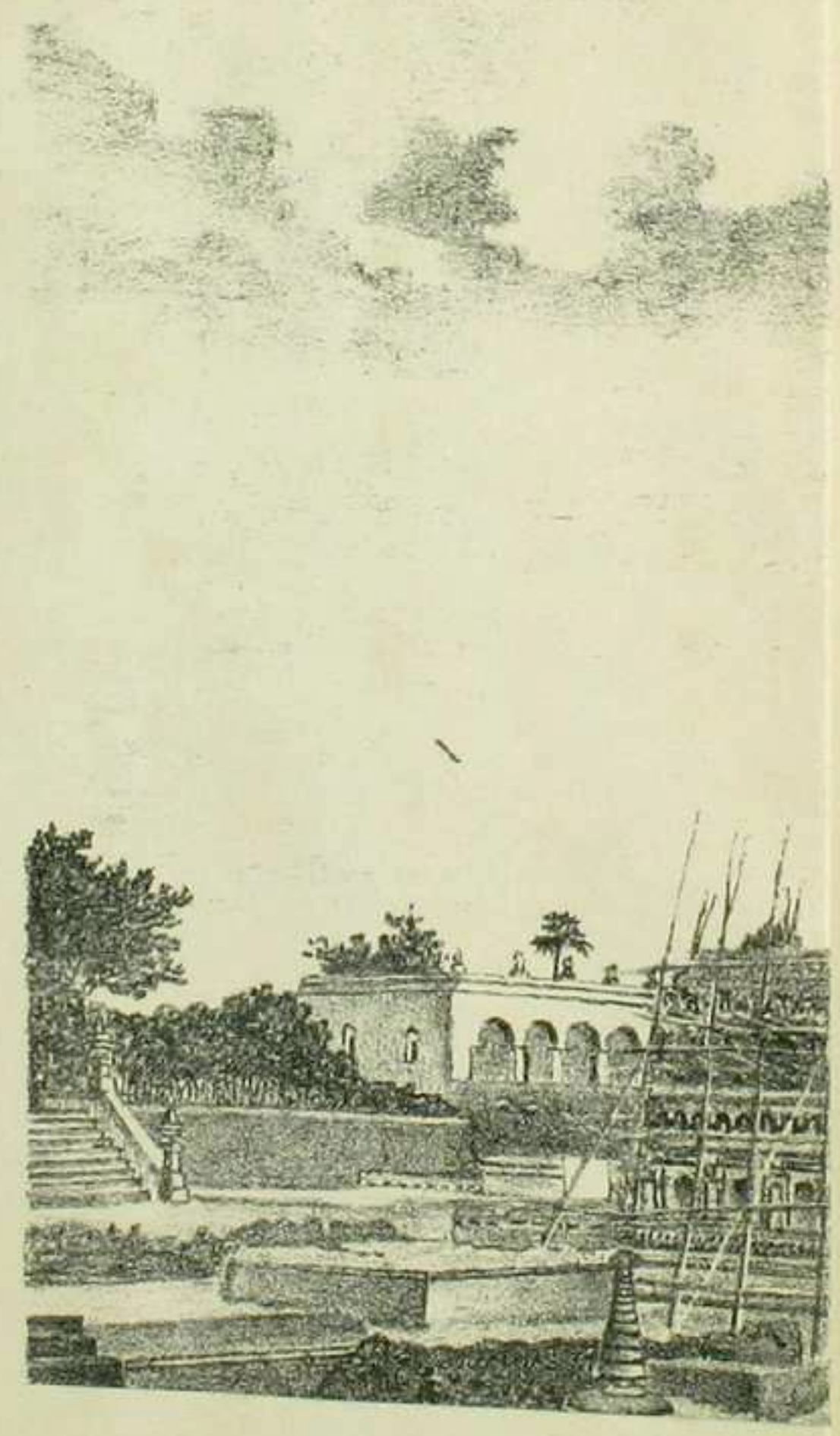
オルテンブルヒ魯西亞（ろしや）の同く「プロフェツシヨル、ペ

トベーフバトリツチ（バトリツチ）各々印度（いन्द）は在學（ざいがく）をること多

年と云ふ也及び英國の同く「プロフェツシヨル、マク

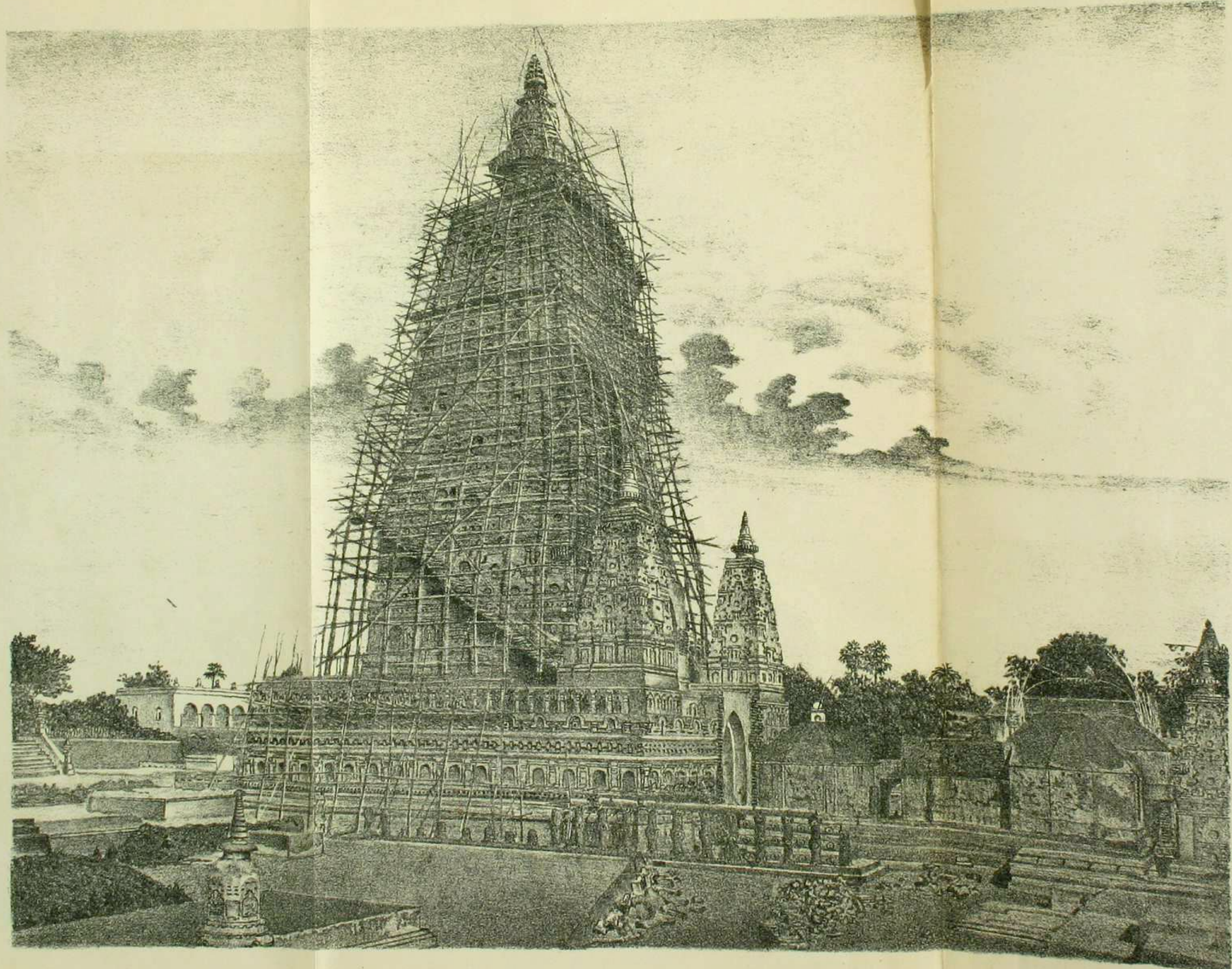
スミルレル氏（スミルレル）此の人ハ印度學（いन्दがく）に従事（じゆんじ）をること數十

年と云ふ也等と詠て此の大墳の所在（ざいざん）を質問（しつもん）せしよ



當圖ハ道詭師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生誕テ之ヲ親寫





當圖ハ道詭師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生誕テ之ヲ觀寫ス、至々堂録山

此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真  
權ヲ願ヒ別ニ縮圖ニ致シ所望ノ人々ニ附與ス可シ



トベールフバトリツチユ(各々印度ニ在學スルこと多  
年ト云ふ也)及び英國の同く「プロフエツレヨル、マク  
スミルレル氏(此の人ハ印度學ニ從事スルこと數十  
年ト云ふ也)等ニ就テ此の大墳の所在ヲ質問せし

皆みなな云く我れ等在ざい印中いんちゆう佛墓ぶつぼの所在そざいに付てハ種々しゆんしゆん之れ  
を搜索さうさくせしりども少すくしも之れを知る由よしに死しり  
し也嗟呼あはれ物換り星移りて二千五六百年來の今日多おほ  
くハ消亡しょうぼう碎滅さいめつせしならんと云ふ也其の上うへる前日ぜんじつは  
西印度せいいन्दより來り鋼買かんがいの「アデレツフ」及および比拿力べなりきの「バ  
子ルゼ」氏し（各々いんどう印度中ちゆうの識者しきしや）等らも咨問しもんせしり亦また  
皆みなな云く我れ等印度いन्दより棲息せいせきせること殆んど六十年  
未いまど其の大墳おほいづみの所在そざいを聞知きんちせむ蓋けざいし消亡碎滅しょうぼうさいめつせし  
ならん歎なげと嗟呼あはれ此こゝの如ごとき有名ゆうめいなる大墳おほいづみありて他邦たはう  
人ひとの之れを知らざるハ且またく措かく今土人いまどちうじんありて之れを

知らざる者ハ我レ太タだ疑ぎ恠がニ耐たえざる也氏其を之  
れを如何いかんとり思おもふるやと云いふる「タークベンゴ」氏  
云いふる「さきむとよ」其を土人つちじんハして尚な不ふ之れを知らざ  
りし所ところ以もんの者其の所由ところよし二ふつ有あり其のひとつハ又また一  
く瘞埋あひまら中ちゆうニ没ぼつるが故ゆゑニ知しまず是れ一つ也其の一  
つつも土人の為ためニ塗抹とすまされし故ゆゑニ知しれども是を一つ  
也此の二つの所由ところよしを以もつての故ゆゑニ土人尚な不ふ之れを知  
らざ況いはんや他邦たはうの人ひとハ於おてをや然しかるる其の瘞埋中あひまらちゆうニ  
没ぼつるが故ゆゑニと云いふ者ハ辨べんをあたせと云へども其  
の土人の為ためニ塗抹とすまさるるが故ゆゑニと云いふ者如何いかん

となれば抑おさも此の大墳を埋没まいぼつせる殆たいてんど其の全体  
を埋うめて塵ちゆうニ其の小尖せうせんを顯あはれ而のみ已ま然しかるる此の佛ぶつ陀だ  
加耶かや村むらハ即すなはち今民居いまみや二十七にじゅうしち戸こハ過まぎぎと云へども  
太た古こ村むらハ即すなはち村民むらぢん口碑くちひ恒つねニ云いふる大聖佛尊だいせいぶつそんの大墳  
ハ即すなはち我われが村むらハ在あり上かみ古大戦こたせん佛徒ぶつたと「ア」徒たの戦せん  
ひ也なりの時賊ときぞくの為ためニ埋没まいぼつさまて今尚いまな不ふ塵ちゆうニ其の小  
尖せうを出いして彼かの土山つちやまの上うへニ在あり是れ即すなはち我われ等  
祖そ先せん来らい云いふる傳でんふる所ところの確説かくせつなりと然しかるる其の輪村りんむら  
の人民等じんみんら皆みな之れをあち消けして云いふる彼かを云いふる大聖  
佛尊ぶつそんの墳墓ふんぼハ我われが村中むらちゆうニ在ありと何なにんぞ自みづから驕おごること

三行各一ノ三  
三三

との太だ甚しきや其の小尖の如き者ハ必竟トて他  
 の古碑の存をる而已と是れは由りてや適々十里二  
 十里外の人々其の輪村の人ハ逢ふごとく問ふて云  
 く佛陀加耶村ハ大聖世尊の墳墓有りと果して真  
 なる歟即ち輪人等皆な云く其れハ是れ佛陀加耶村  
 民の私言ハ一て實ニ來るハ足らざる妄説なれを敢  
 て惑ふこと勿れと塗抹されたり是ハ於て十里二十  
 里外の人民尚不此の塗抹の為め誤まらる況や百  
 里二百里外の遠人及び印度全國の人民ハ於てをや  
 是也即ち我々大墳の久しく埋もれて知をざる所以

ん也然るハ今より二十年前英國の天子佛陀加耶人  
 民の口碑ハ基き印度政府ハ命トて試ニ之れを掘ら  
 令めたり此の間だハ於て種々事情之れ有りと云ハ  
 ども遂ニ五年前此の大墳を見發せり然るハ印度ハ  
 遼たる大國なをハ尚不未ニ悉くハ之れを知らざる  
 也是れ即ち師の偵尋をる特ニ勞苦せられハ所以  
 也

龍云く是れハ由て之れを云ハバ支那歴代の三藏等  
 の天竺ハ入るも未だ此の佛尊の真墳ハ拜詣セ一者  
 ハ蓋一一人も之れ非ざる歟然るハ我々之れと發見

さるの今日ふ中りて直ち拜詣をることを得る者  
い實は千歳の一過と云ふ可き哉  
大墳の右側は龍の碑文を建る話

余ダークベンゴ氏は請ふて云く我れ爰より來りて此  
の大墳は詣をることい我が日本建國以來の大初な  
れを庶幾くハ此の時日を石に勒し之れを大墳の側  
に建て、日本人も亦來至せることを全地球上の  
人は示めさんと欲を氏其れ之れを許をや否や氏云く  
我れ將は他日之れと政府は云ふ可し師其れ之を  
建て、君の清操と千歳不朽を示めし玉ありとて

さるの今日ふ中りて直ち拜詣をることと得る者  
ハ實ニ千歳の一過と云ふ可き哉  
大墳の右側ニ龍ノ碑文を建る話  
余ダークベンゴ氏は請ふて云く我れ爰ニ來りて此  
の大墳ニ詣をることハ我が日本建國以來の大初な  
れを庶幾ハ此の時日を石ニ勒之れを大墳の側  
ニ建て、日本人も亦ニ來至せることを全地球上の  
人ニ示めさんと欲を氏其れ之れを許をや否や氏云く  
我れ將ニ他日之れを政府ニ云ふ可一師其れ之を  
建て、君の清操と千歳不朽ニ示め一玉あるとて



日本開闢來

余始詣予

叙尊墓前

明治十六年

道龍

十二月四日



幸ひ六尺有餘の堅石を附與されける故に左の小文  
を記したり(即今大墳の修營に付石工の爰に在るを  
以て彫事幸に速成せり)

日本開闢以來余始詣于釋尊之墓前明治十六年

十二月四日道龍

右ぎ碑石ハ佛尊大墳の右側ニ建てたれを他日我々  
日本人の重ねて行く者あらば幸に一覽せよ即ち其  
の該圖を今爰に繪示す(是ハ印度の白布を以て其  
の碑面を覆ひ余自ら之を摸寫したる者なり)  
タークベンゴ氏より大墳の寫真を附與せらるゝの

右ぎ碑石等のことよ付き日々加耶より爰に来往せ  
 しが先づ碑石も之れを樹立いさし且つ大墳墓の事  
 歴等も其の槩數ハ之れを了知したれむ此の上忍  
 何卒ぞ大墳墓の全形を寫真に米り携る歸りて人々  
 示せならバ其の欣喜必ぞ若干ならんと思ふ故に  
 ダークベンゴ氏に此のことを委く縷陳して依頼せ  
 しかば氏云く之れを寫すことと別は差支ハ之を无  
 くと云へども此の地を此の如き草茫たる田舎のこ  
 となきむ寫真師などハ一人も有ること无し若し之

きを招りんとせるときハ數百里の外にクベンキポー  
 此に至りて之れを覓む可し然らバ則ち聊爾のこと  
 非ざる也如くぞ師且く瑛て庶幾くハ師の國土番  
 地を我れに記附せられよ他日營事終らば我れ(ダ  
 クベンゴ氏自ら寫真を能くを故に云ふこと然り自  
 ら之れを繕寫して必ぞ若干葉を送致を可しと余云  
 く氏の芳意辱きを則ち辱しと云へども所謂る遠水  
 不救近火(貞觀政要の言)とて遠方の水も近所の火事  
 を救ふ能はざるの類ひにして他日の若干葉ハ今日  
 一葉の感憤を與ふるの速うあるに如くされど仰ぎ



願くハ氏我が為り一葉の親寫を勞せよと云ハバ氏云く師の非常の渴望なれを如何んとも為可きなれども其の技藥(寫真藥)ハ今日氏の手許ニ无一故ニ然ク云ふを得るとも同ク之れを「ベンキボール」ニ覓む可きなれむ是れ亦ク聊爾のことニ非ざる也既ニ五年前のことなり一ガ我れ自ら十葉の寫真を米リ其の二葉ハ此の大墳の戸上ニ掲示一其の他ハ英國天子(二葉)印度政府(二葉)某れ皇族(二葉)ニ差出一殘る二葉ハ我れ自ら之を所藏せり今師渴望の太だ甚一キ我ガ所藏を呈ど可一兩日俟ち玉る米リ調べ參

ら可一とのこと故余爵然として云く氏若一其の鐘發を祝ハ實ニ敬戴の至り也幾日よても俟つ可一として此の日ハ亦ク加耶の里ニ歸りけるさて三日の後ちタークベンゴ氏其の藏する所の寫真二葉を附與されり(今爰ニ總示する所の者即ち是をなす)是ニ於て余之れを大謝して云く是を此の二葉を豈ニ唯ク隨珠(隨侯の珠)和璧(和氏の璧)のみならんや我が三千八百萬人の大墳坐拜の嘉祝實ニ敬荷の至ニ耐るざる也右ぎ二圖の中第一圖ハ五年前初めて掘り出

る所の者より其の第二圖を五年以後に修營する所の者也

大墳の石片を奉持して歸朝するの語

頃日來碑文及び寫真のことより付き日々鞅掌中より修

營小屋の側らと眇顧するは墳墓の石片堆をなす最

とも嚴重之れを保護する有り一日余其の内より入

り一片の石を采りて「ダークベンゴ」氏に言つて云く

庶幾く此の一片を覓せんことを氏莞爾ふて云く

師何んぞ存りて覓むることの豪氣ある其まは契り

ませぬと余亦と笑ふて云く凡そ物を覓る豪氣は非



當石ハ二箇共ニ釋尊墳墓ノ石片ニシテ同シク師ノ持來ラル所ノモノナリ生謹



らぞんむ其の大欲を果すこと能はざれども也氏其れ  
之を賤む氏云く今余が契らぬと云ふ者ハ敢て  
クベンゴが私言ハ非ざる也一ハ即ち政府の猥り  
ハ濫佚を可らざるの命有り一ハ修營の秩序由  
りて其の罅漏を補直を可きを以て也と余云く氏の  
云ふ所の者ハ小理由る我が覓む所の者ハ大理  
小由る也必竟トて大小の分ある而已我を他日云ふ  
可一氏其れ少く考ふ玉る一とて此の日も亦之  
加耶の里を歸りけり  
一日余クベンゴ氏ハ言つて云く此の回も氏の

東洋文庫蔵書

懇助こんすけより由りて我が調査てんさの事都て完全くわんぜんなることを得たり由りて我れ將まささよ別わかを成さんとす實じつは戀々こひ々の至り耐たえざる也之れは就つき前まへきの石のことは付て今一應理ひとしやうりの大小を陳ちんせんとす其の采木さいもくを君の意は任まかせ可よき而已凡まづそ事物じぶつの間あひごは於て小理せうりを知りて大理たいりを知らざる者ものを細人さいじん曲士きよくしの為ためを所ところとさる也又また大理たいりは由りてを小理せうりとも屑くずとせざる者ものを大人おとな豪傑ごうけつの為ためを所ところとさる也然るは今氏の云ふ所の者を小理せうりよして其の大理たいりの如ごときを太ふど未いまど一也如何いかんとなむを今氏若ごとし我われが云ふ所を許ゆるさる所謂いふ一葉いつえつ

の墜落ついでらくは由りて天下の秋あきを知ると云ふこと有りて石いしを塵ちりは是れ片小ぺんせうと云へども之をよ由りて以て我が大墳おほふん全体けんたいの寶石ほうせきと其の古色こしきとを全ぜん了りょうし益々えきえき其の信然しんぜん三千八百萬人さんぱちやうばんにんのまじを所ところありて合あせて曩なは既きふ所の寫真しゃしんの尊嚴そんげんと大成たいせいなるなり是は於て初めて氏の大既たいきを全ぜんふと云ふ可よき也氏其を塵ちりは其の小片せうぺんを惜おしんで其の大体たいたいを捨すること勿なき我亦われも豪氣ごうきを以て之れを覓もとむるは非ひを必竟ひつじやうして之れを覓もとむる所以ゆゑの理を盡つくす而已と云へを氏大おほひは笑わらふて云く我われを即すなはち大悟だいごする所あり師其れ其の石片せきぺんを持ち行

け我れ即ち處まよをる所ある可き也然しかし歸途かへりみち必かならずぞ人ひとは  
咎とがめらるゝこと勿なれと是こゝは於おて此こゝの大小おほいせの二片石ふたせきいし  
を領受りやうじやうし得えたる也其そのの形かたちも今爰いまこゝは糝示せんじをる者即すなはち  
是こゝ也

以上墳墓おんぼの槩狀あきざき此こゝの如ごとし其そのの詳細まづかのこと他日たぎ續つ  
編へんを製せいして示しを可よき也

是こゝは於おて本月このげつ十一日じゅういちにち午後ごご第二時にじ「ダークベンゴ」氏しは  
別わかれを告つげ翌あした十二日じふににち加耶カヤの主人しゅじんも留中りゅうちゆうの懇到こんたうを  
謝しやうして午前ごぜん第十時じゅうじ加耶カヤを發はして「バンクボート」の方かたを  
向むかひける此こゝの回まわり「ダークベンゴ」氏しの教おしえは由よしりて

大おほひは便路べんろを得えたれど路次ろじの勞苦らうくを死しりりけり午  
後ごご第六時だいろくじ「バンクボート」は至いた著ちやくせり今夜こんやを取とり敢あむ  
爰こゝは一泊いっぱくをる也

翌あした十三日じふさんにち午前ごぜん第七時しちじ同所どうじよより艦車かんぐるを乗のり午後ごご第八  
時はちじ東天竺とうてんぢくの甲谷陀かうがだの港みなとは著ちやくし「ミニヤポツフェイス」ス  
トレートとらうとと云いふ街まちの「ハンマダライ」(第三番地)は投宿とうしゆく  
せり爰こゝは止とどまること六日間むいっかのあひだ日々ひび「プロキーン」と云いふ印  
度いんの駕がは乗のりて府中ふちゆうを點見けんけんせし也此こゝの甲谷陀かうがだハ人  
民たみ凡たゞそ一百万餘いちひゃくまんじゆ口有くちりと云いふ也然しかし人情にんじやうの菲薄ひはくな  
る益えきし世界せかい第一だいいちと想おもはる其そのの一ひとを云いへば十じゆ「ロピー」

天竺行跡 卷之三  
の物を二「ロピ」半或ハ三「ロピ」位ままでハまける  
也其の他ハ推おして知る可べし此の甲谷陀の港みなとハ付き種  
々の事こと状じやうありと云いつども餘紙よ无なければ續編ぞくへんハ送かる  
也

二十日午前第四時「ペオコンパニ」艦くわんハ乗のりりて甲谷  
陀の港を發はつち即ち此の河線かきせんを「ホグレ」河がと名なけて鉛  
絶斯げつそ（恒河）の流ながれ初はじめ河中かみち二三丁より起おこりて五  
丁十丁遂すなはち十里餘じゆり及およんで四方の眺望てうぼう天水てんすい茫々ぼうぼうた  
り又また鉛絶斯河げんげつそがは是れより北藍古きたんこの方かた急流きゅうりゅうきて此の  
河よりハ更さらハ大なりと云いふ也此の河を見みるハ附つけて

も印度の大國たいこくたることと知るしるる也なり豈あハ獨逸どいつの  
「エルメ」や魯西亞ろしやの「子ブカ」や塹斯土利せんすどの「ドノア」河等  
の類るいひならんや即ち甲谷陀の港より二晝夜ふちやを経て  
漸おそく河口がわを放はなちて全すべく旁葛刺ぼんがせ（東印度洋）ハ出いでたり  
其そのより二十七日午後第十時「サイム」の「ピ」ナンの  
港みなとハ着つき是れより二十九日午前第九時新和蘭港しんわらんハ  
著あり再び歐洲通航おしやうの大路だいじゆハ出いで、是れより暹羅  
及および支那を経て无事むじハ歸朝きしやうを致いたしたり

北畠道龍師 天竺行路次所見卷三 畢

北畠道龍師著述目錄

近發之部

因明入正理論與便

因明新指

此書、精神學物理學議事裁判等實地ニ就ク此因明ノ論方ヲ實用シ以テ世ノ識者ヲ佐ケントスルナリ

法界獨斷

世界宗教之興廢

天竺行路次所見

此書ハ師各國ヲ巡回シテ遂ニ印度ニ入ルノ路次見ル所ノ天子政府宗教ノ實況ヲ採載スル者ニシテ其ノ名山大川春花秋葉ノ笑墜等ノ如キハ敢テ記スルニ違フラスト云フ

三卷 既刺

三卷

一卷

三卷

三卷 既刺



六字名義

二卷

此ノ書ハ佛教神道基督三宗ノ佛神ノ同異ヲ弁シ遂ニ人間生死ノ一往一來タル本理ヲ説明スル者ナリ

真宗真要

前編 四卷  
後編

此ノ書ハ師自カラ以テ立ツ所ノ宗教ノ本真ヲ示ス者ナリ

政治宗教對係之真理

前 六卷  
後

宗教憲法之相係

二卷

宗教兩院之相係

二卷

宗教文部之相係

二卷

宗教文明之相係

二卷

教育二方之本理

一卷

追發之部

宗教歴史

廿五卷

此ノ書初ノ十五卷ハ亞細亞宗教ノ史ニシテ后ノ十卷ハ歐洲宗教ノ史ナリト云フ

獨英墺佛小學校同異辨

一卷

宗 幼稚院義

一卷

宗 啞盲院義

一卷

宗 女學校義

一卷

陸海軍宗教必要

二卷

宗教刑場相係

二卷

印度「ヒロソヒー」辨

三卷

華天二教之裁決

二卷

唯識論新指

十卷

以上ノ著作ハ師ノ案已ニ定マル所ノ者ニシ  
テ即今我邦ノ為メニ日夜勵勉起艸ニ居ラル  
レハ追々發行之レアルベシ

明治十八年三月十九日版權免許  
同 十九年七月 出版

定價金壹圓四十錢

著述人

和歌山縣士族

北畠道龍

東京牛込區白銀町廿八番地寄留

出版人

同 北畠孝夫

東京牛込區白銀町廿八番地寄留

出版所

荒浪平治郎

東京牛込區白銀町廿八番地寄留



東京馬喰町二丁目

島村利助

同南傳馬町壹丁目

吉川半七

東京淡路町

賣 同雉子町

同本郷春木町三丁目

同日本橋區吳服町

同三十間堀

巖々々々 堂

團々 社支店

島村利助支店

野口 愛

九春 堂

大坂備後町四丁目

山村彦助

東京柳原通

田中増蔵

同心斎橋筋

松村九兵衛

同銀座四丁目

博聞社

同本町四丁目

岡島真七

名古屋玉屋町

片野東四郎

同備後町四丁目

梅原龜七

静岡江川町

廣瀨市藏

西京二條通り

若林茂助

同吳服町

青木榮次郎

同東洞院三條上

村上勘兵衛

同新通壺丁目

勝見儀助

同御幸町姉小路上

藤井孫兵衛

甲斐甲府

成島治平

同河原町通條下

大黒屋書舗

甲府常盤町

内藤傳右衛門

同寺町四條上

田中治兵衛

信那長野元善子

西澤喜太郎

岐阜米屋町

三浦源助

同松本南深志町

高見甚左門

埼玉縣鴻巣駅

長島為一郎

肥後熊本新三目

長崎次郎

茨木縣水戸市泉町

川又銀藏

藝那廣島

早靈社

越後長岡

佐藤作平

肥前佐賀

西村萬次郎

同同

目黒十郎

阿波徳島

坂井萬吉

同新泻古町通

井筒駒吉

出雲松江

川岡清助

加賀金沢尾張町 牧野作平 藝為廣島 藤井孫兵衛

同金沢 近田太平 和歌山湊野町 野田大次郎

越中富田町 守川吉兵衛 東海道濱松 白木鍵次郎

羽前鶴岡 小池藤次郎 參劔豐橋 豐川堂

羽後秋田 岡田治助 東海道藤枝宿 杉山英太郎

仙臺大町 木村文助

羽前米沢 中村清兵衛

羽後秋田大町三首 本間金之助

陸中盛岡中橋邊 澤田正助

羽前山形七日町 五十嵐太右門



